
浮生夢のごとし

笹ヶ根伊都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮生夢の「」とし

【Zコード】

Z5075F

【作者名】

笹ヶ根伊都

【あらすじ】

環は18歳。大学生活を始めるにあたって山陰の小さな市に越してきた。新居となつた失踪した叔母の家には、春日と大童子という化生が住み着いていた。大童子の本当の姿を探し、叔母を見つけることができるか！（という流れになる予定）『その公国』がシリアルアスなので、少し笑いを入れてみました。いよいよ、大童子の白刃がうなります。

初めてその女を見た時、右手に握り締めた刃が小さく鳴った。
怖いんじゃねえ。もちろん、寒いんでもねえ。

武者震いだ。

そして初めて狂氣から覚めて、俺は返り血を浴びた自分の姿を恥じた。

俺は知つた。

こいつは俺の運命を示す女だ。

俺には、もう何も残っちゃいない。

俺は俺自身が何者かすらもう分かっていない存在だったから。
斬つて斬つて斬りまくつて、その返り血でどうにか自分の輪郭を刻むよつなそんな存在。

守る者も欲しい物ももうないと思つていた。

そう信じていた俺に再び歩き出すための道を示してくれる女。

俺が何者で、何をし、何処へ行くのか、その答えを『』えてくれる女。
それがお前だつた。

ねえ、たまちやん。

そう言つて私の手をとつたのは、5年前にいなくなつた美しい叔母。
いつもこんなふうにきちんと着物を着てたつけてたまちやん、本当はとっても田がいいの。

おばけやんね、田隠してたの。耳もふさいだたのよ。
でも、もうこの手はずすね。

おばけやん? なに言つてるの?

あの子達と仲良くしてね。

誰と仲良くすればいいの? ほんやつとした意識で私は尋ねる。
大童子と春日。

叔母がそつと立ち上がる気配がした。

どこいくの？おばちゃん。

私は手を伸ばす。だけど、

鼻がつーんと冷たい。

あなたとあの子達が、手を伸ばしてくれたらその先にあたしゃいる。

大童子の本当の姿を探してあげて。

おばちゃん？

去つていく気配がするけど、私の体はまだ眠つている。

何の音もしない。

何の匂いもしない。

ああ、そうだった。

寝返りをうつ。

引っ越してきたばかりの家で迎える朝は、匂いも音もビコかよそよそしい。

でも、昨日の疲れが抜けきらない。

そういうえば、荷解きを手伝いに来ていた三つ年のことこの言つたつけ。

「こんなどこに住みたい気が知れないよ。僕なら眠れそうにないね。いろんな物がうようよ居過ぎて。」

別にムカデも、ゴキブリも出なかつた。つてか、今冬だし。怖がりな奴。

寒い。鼻先が冷たい。

もう一度、布団を鼻先まで引き上げて、寝返りを打つ。

そのとき、頭上で少女の声がした。

「で、どうするね。この餓鬼。」

「んー、まあ、俺達、見えてねえようだし？いいんじゃね？」

男の声。ん？男？男だと？

「それは、駄目だわね。私にもプライバシーつてもんがあるわね。」

まだ幼さを残す少女の声が、少しどがつた。しかも、出雲弁だし。

「へー、おめえみたいな餓鬼にもプライバシーつてもんがあるんだ

「おじさん、知らなかつたなあ。」

いや、棒読みだし。

「当たり前だわね。そうでなければ、『』のあたりの家に祟つて、片端から追い出したりしないわね。おつむん。」

いや、なんか。本当はこの家、私しかいないんですけど。その前に祟るつて何？

「そんなことだから、『』の家、幽靈屋敷つてよばれんだよ。そこんとこ分かつてる？」

「幽靈が主の家は、幽靈屋敷に決まつてるわね。」

幽靈？ 幽靈つてなに？ あれ？ 私、完全に目を開けるタイミングを失つてる？ つていうか、この家の主は私なんですけど！

動搖するも目を閉じたままの私の頭上で少女の声は続く。

「大ちゃん、考えてもみる。女は口やかましい生き物だわね。『どうして、私の歯ブラシつかうの！』とか、『なんで私の話をもつと聞いてくれないの！』とか『靴下は、ちゃんと洗濯用の袋に入れて！』とか毎日毎日お母さんみたく言われてみる、『』たちが参つてしまつがね。」

つか、それどんな、シユチユニークンだよ。

「無理！ ゼットー、そんなの無理。つてか、それお母さんじやなくて、奥さんだから。」

「でしょ、でしょ。じゃあ、やるしかないわね。」

少女がはしゃいだ声を上げると、男が懐から何かを取り出したようだ。紙を広げるような音がする。

「てーと、どうする？ 狐火グリル『』ース、わら人形串刺し『』ース、油澄まし釜揚げ『』ースつと。」

「私は最近、油ものはいらないね。」

「喰う？ 嘰う氣なのか？ この私を喰らう氣か？」

思わず飛び起きる。目の前に半透明の男と、同じく半透明の少女の驚いた顔がある。

男は肩から蜘蛛の巣がかかつた模様の紺の半纏に、赤穂浪士が着て

いるような火消し装束。そして腰に刀。少女は色が白くつややかな黒髪が肩まで。赤い着物は可愛らしい容貌に映え、いかにも座敷わらしといったようないでたちだ。

その二人が私の顔を見て、同時に言った。

「おはよう」

いやつ。み、見えない。私はなにも見ていない。知らない。絶対認めん、こんな世界は。

私、日下 環はめでたく大学に合格し、新生活を始めるつもりでの山陰の小さな町にやってきた。

これまでが母と娘の親一人子一人の暮らしで、日中につつて言えば自分の世話は自分でして来た。

それだけに一人暮らしは不安だが、どこか新鮮味とは程遠い。

この古い日本家屋は五年前まで私と十三歳違いの叔母が暮らしていたが、五年前のある日突然『この家の名義を環に書き換えてね』という書置きを遺して、失踪してしまった。

叔母は民族学だの仏像だのに造詣が深く、私大の助手でもあつたし、小説家でもあつた。

今年、私が高校を卒業するタイミングで母が再婚した。

私はよく知らないその人と一つ屋根の下暮らすのがいやで、叔母が遺してくれたこの家で新生活を始めようと、受験する大学も選んだ。卒業式が終わると同時に、越してきたのが昨日。

それが赤の他人、それも化け物と同じ屋根の下暮らすことにならうとは。

この日まで想像だにしなかつた。

湯を沸かしながら、背後をうかがう。

どうしよう、どうしよう。

この18年と6ヶ月、一日たりとも幽霊の存在など認めた日はなかった。祖母や叔母達はいろいろ見えるだの聞こえるだの言っていたが、母の代からこちらに遺伝してこなかつたはずだった。

いまさら、この志を曲げるわけにはいかん。

この後続く大学生活を考えると、絶対にいかん。

「ぜつてー、俺らのこと気付いてるって。」

「この鈍感女、絶対私たちに気付いてないわね。」

まだぬるいテンションで言い合っている一人を放置。

見えない、聞こえない、何にも知らない。

食器棚からコップを出して、とりあえずインスタントのコーヒーを飲もう。この悪い夢が覚めるかもしない。

「インスタントのコーヒーってコーヒーでないさね。」

「いや、缶コーヒーよりはましだ。あれは、コーヒーじゃねえ、豆ジースだ。」

いや、そんなのどうでもいいから、ほんとに。

炊飯器が現実感に満ちた音を立てて、この飯が炊き上がる。フライパンを温め、油を人さじ、田玉焼きを焼く。焦げ目が付いたら裏返して中身はとろとろ回りはこんがりの田玉焼きの出来上がり。鰯節とゴマと海苔をのせた炊きたてのこの飯に、焼きたての田玉焼きを飾る。これにしょうゆをひとさじ。ネギがあれば最高だが、昨日越してきたばかりなので、冷蔵庫はまだ空っぽだ。

「あ、あのにゃんこめし、美味しいそう。」

にゃんこめし? びくりと私の眉が動く。

「俺、あれ喰うわ。あのにゃんこめし。」

なんだ、貴様ら。人の好物を。卵ご飯・環スペシャルをにゃんこめしだと?

私は取りかけた箸を置き、食卓の椅子をひいて立ち上がる。

ちやつかり席に座つた二人が見計らつたようにどんぶりに手を伸ばす。すると不思議なことにどんぶりから半透明のどんぶりが分裂する。

もういい。

あるがまま受け止めてやるよ。

「いただきまーす。」

「機嫌な二人の声を背に私は嗜虐的な気分で奥の間に向かう。あそこには、叔母が遺したブツがある。

よからうとも、下賤のやからども。そうして安穩としているがいい。目に物見せてやる。私を愚弄した罰だ。

私は奥の間に行つて壁に掛けたあるブツをとつてきた。袋をはずして、食卓を囲んでいる二人の間に叩きつける。

薙刀の切つ先がまだ中身の入つていない胡椒入れを両断する。叔母ちゃん、返してくれた目と耳つてこいつことなんだね。

いいよ。いいさ。受け入れてやるよ。この高い環境順応力でな。

二人は、真つ二つの胡椒入れを一瞥して、今度は凍つた顔をこちらに向けた。相手が幽靈だろうが、妖怪だろうが知つたこつちやない。「朝つぱらから、ぐぢやぐぢやつるせんだよ。貴様ら！ 幽靈だろうが、妖怪だろうが、この際かまやしねえ。刻んで火曜の不燃ゴミにだしてやろうか！ ええつ？ それとも、コンクリ詰めにして三途の川に沈めてやろうか。どちらか選びやがれ！ この野郎ども！」

そう。これが、私たちの出会いだつた。

座敷に仁王立ちの私は正座の二人を目の前にしていた。どついうわけか、二人はもはや半透明ではない。

「こ、こわいねえ。お嬢さん。」

「嫁の行き手がなくなるわね。」

おいおい、てめえの立場がわかつてんのか、こら。薙刀の先をドンと付いて音を立てるど、一人はびくりと肩をすくめた。

「貴様！」私は、男の方に顔を向けた。「名を名乗れ。」

男の目が不自然にきょときょとと動く。

「おい、目が泳いでんぞ。」どすの利いた声で促すと男は早口で言った。視線がまだ梱包されている陶器類のほうに向かつ。

「ええと、オガミダイジロウ。」

「落ちてる新聞紙のテレビ番組欄から名前取るのやめて。お前の父ちゃん、子づれ狼か。しとしとぴつちゃんか。似合いの髪型にして

やろうか？ああ？」

ふるふると首をふる男の方を見て、クスクス笑っている少女に視線を移す。

「じゃあ、お前！」

少女は飛び上がった。

「えつと、お春？」

なんで、疑問符なんだ。

「自分の名前にクエスチョンマークつけんな！さては、それも偽名だろう？」

「だつて、名乗りたくないわね。」

罵倒する私を恨めしそうに上目遣いで見上げて、少女は口を尖らせた。

「俺らは名をとられるとその人には手出しできんからな。」

男が説明口調で付け加えた。

ほう。私は目を細める。叔母ちゃん、なんて言つてたつけ。ダイジロウに、お春か。

化生の浅知恵もいい加減なものだ。さあ、覚悟はいいか。

「大童子。」

男がぐと喉から音をだした。

「春日。」

わ、と少女が両の手で頭を押さえる。

「この世は生きている人間様のものだ。そして、この家ではそれが私だ。よつて、このうちは私のものだ。お前らここから出て行け。」私の言葉に、一体の物の怪は首をふるふると横に振った。

これは、想定内だ。

せっかくの同居人、利用しない手立てはない。もちろん、『仲良く』する気だ。

「そうか、出て行かんか。それならよからう。私は心が寛大だから、ここに置いてやってもいい。ただし。」

恐る恐るこちらを伺う一人に私は目を細める。

「いい子にしろよ。働かざる者、食うべからずだ。私はこわいぞ。聰子叔母のようにはいかんからな。」

一瞬二人は顔を見合させて、次の瞬間腹を抱えて笑いだした。な、なんだ。

「お前が、あの美人で清楚な聰子の姪とは驚きだねえ。」「似ても似つかないわね。」

うるせー、化け物。

そのとき、玄関のチャイムが鳴った。

「初心者なのに、不慣れな町なのに、なんでこんな後ろに積んでるわけ？」

不慣れな町で買い物に付き合ってくれるという従兄弟がちらりとバツクミラーを覗いて言った。バツクミラー越しに件の二人が、後部座席にちゃつかり収まつてシートベルトまでしている。

「もしかして、見えてるのか？」

青ざめている従兄弟の顔を凝視して、私は買つてもうつたばかりの中古車のハンドルを握り締めた。

眼鏡をすりあげる従兄弟、君、手が震えているぞ！

「見えてるよ、最初から。つーか、聰子叔母のところに遊びに行く度、どれだけこいつらにいじめられたことか。」

そ、そうなのか？振り返ると、一人は凶悪な微笑みを浮かべて掌をひらひらさせた。

「やー。皓くん。君、背じんどん伸びるねえ。屋根つきやぶんじゃねー？」

「誰かと思えば、くそ眼鏡か。」

そのあざけりを含んだ声に皓が毛を逆立てた。まるで猫みたいだ。

「ほら見ろ、既に僕をからかってるじゃねーか。なんであんなの呼び覚ましたんだ。昨日は、雑魚はいたが、こんな大物はいなかつたぞ。」

あの雑魚共は俺達が一掃したもんね。というふざけた合いの手が後ろから入るが、皓は完全無視だ。

「今日という今まで、環ねーさんだけは、日下家の呪われた靈力の血から解放されていると思っていたのに…」

皓、取り乱しそうだな。

「私も、今日という今まで鈍感パワーで護られていると思っていたんだが。」

いつもはクールで、この前もバレンタインチョコを44個ゲットし、44人の女を泣かせた従兄弟が目をむいた。ほう、これは見ものじゃないか。

「だったら、なーんで、そんなにあつさり運命あきらめて受け入れちゃってるわけ?しかもなんで、こんな大物を飼いならしてんの?」

ふふんと私は鼻を鳴らした。

今、思えば私は気を紛らさせて、救われたかったのだ。

一人で暮らすという孤独と、新しく築かなくてはいけない家族関係、母との距離をうまく取れないでいる閉塞感、そんなものから目をそらし、新しい日々をくれる何かに強く惹かれたのだ。

「聰子叔母に家ごと譲られたんだ。面白そうだと思って。」

後ろの二人はようやくエンジンを掛けた私に不満そうだ。

「早いいこーぜ。お買い物。雪見大福買ってよ。おねーさん。」

「私は花柄のお茶碗がいい!」

「おい、皓が小声で言つた。

「本気で。いや、真剣これ飼う気?」

祖母の菩提寺に参つたついで、紅葉を見にここまで足をのばしたつていうのに。

雨が降っていたっけ。

夏の緑葉には雨のつややかさも風情があるしが、晚秋の枯れ紅葉に

雨だなんてなんだか辛氣臭い。

あの日、私は近鉄の駅近くの懐かしいアーケードを時間つぶしに歩いてた。

これから、近鉄に乗つて、大阪までそこから新幹線で岡山で乗り換え。我が家までは6時間はかかる計算だつた。もう一日泊まつていけばよかつたかしらね。

にぎやかだった商店街も池近くまでたどると人通りもなく寂しい。名物の茶粥を売る店があつて、その近くに小さな古物商を見つけた。赤いサル型をした護りが軒先にぶら下がつていて、ショーケースにはおどろおどろしいお雛様があつたつけ。後れ毛が不気味なお雛さまは口元が緩んで、お歯黒を履いた歯が見えたし、白粉の剥げたお内裏様は、他に例を見ないほどにサディステイックな微笑みを浮かべていた。

私は古ぼけた引き戸を薄く開いて、中をうかがつた。別にお雛さまが欲しかつたわけじゃない。曳かれるつて、ああいうことを言つのね。

最初から欲しかつたのは多分貴方。

貴方の方でもあそこから出る術を探してたんでしょ？

とにかく、あの店で私は貴方を見つけた。

ほつれ毛のかかる白い端整な顔立ち。険しいといふより苦悩を秘めたような眉、伏目がちの目は二重の切れ長。鼻筋は他にみたことがないほどに、すつきりとすこやか。嫣然と朱を履いた唇から除く歯列は整然としていた。どこか、貴方はまどろんでいるように見えた。それはうつくしい面おもてだった。強い靈力をたたえた男、大童子の面おおどじゆだとすぐに分かつた。

古道具屋の女将さんは、商売人なのに、どうもそれは良くないって私が貴方を買うのを止めたつて。

「この面は夜な夜な人を斬るんですよ」つて。
口下の血が騒ぐわ、上等よ。

家にやつとたどり着いて、貴方の入つている包みを居間の炬燵の上

に置いたつ。

家の護り神と普段言つてはばかりない春日は怖がつて近寄らうともしなかつた。

私が買つたばかりの古い反物が雨で湿つていなか確かめていた時、後ろに貴方の氣配を感じた。

傍らに座つた春日が、ちらりとそちらを見ながら、私の袖を曳いて警告したのを覚えている。

振り返ると目が合つて、貴方の右手の刀が小さく鳴つた。

そう、思つたとおり貴方の姿はあの面おもてと同じぐらい綺麗うつくしだった。

程よく刈られた髪は無造作むぞうさだったし、暗い色の火消し装束ほきゆうしはとても似合つていた。

こちらを見据えるすつきりとした面差しは目を奪うのに十分だった。目を奪うといえば、手甲てあについた血のりもそうだったけど。

だけど、それよりも胸を突いたのは、貴方のその哀しげな目めだった。目を離すことができない。

手を差し伸べずにはいられない。

それが、貴方あなただった。

ササガネです。

山陰はもう寒い。隣の県ではタミフルの効かない悪玉インフルが出
現しているとか。気をつけましょう。察しのよい方は、山陰地方の
小さな市がどこか当たりをつけてきたんではないでしょうか。公園
はシリアル傾向なので、笑いと、友情とを織り交ぜて書けたらい
なと思うのでありました。

ちょびっと、怖いかも。

夜、一人はこわい？？いや、そんな怖くはないか。

(1)

三円とはいえ、まだ寒い。

そして、炬燵の中に納まっている化け物が一人、いや一体、あることは一個。

寝そべって漫画を読んでいる一人だが、花柄の炬燵布団の中では、壮絶な陣地取り合戦が繰り広げられている。

いや、おねえさん入れないでしちゃうが。

「寝てばかりいると、消化に悪いよ。」

腰に手をあてて言うが、一人とも無視。漫画に夢中だ。

「だから、寝てばかりは、牛になるよ。」

牛になるべ。つか、なれ。いや、なりやがれ。

怒りを押し殺し、優しい声で尋ねる。

「今日、買出し当番、だれかな？ 洗濯用洗剤、買って来てよ。春日が漫画をめぐりながらいう。

「大ちゃんだわね。」

「いやー、春田ちゃん。ここはダイエットをかねていつと二一か。つーか、俺、行つたよ。うん、おりやあ、行つた。」

いや、大ちゃん。

君、春日を一警したその日つき、ヒジヨーに疑わしいから。

春日も負けてはいない。

「いつ行つたんだよ。てめー。一回、でないと。中が足すべくなるわね。」

「ばかっ。てめえ。俺の足はすべくねえ。朝露に濡れる薔薇の香りがすらあ。あれえ。なんかにおつわけ?足すべのせ、おめえじやねえ?」

「女の子になにこゝか！」

「女の子って、おめえの場合、ビジュアルだけの話だろ？その実、えーといくつだけ？今年の節分、いくつ豆を食べましたか？」

「そうこゝ、おっさんはいくつ食べましたか？」

「えーと、おれ？二十六個？」

「ううそだあ！年、たば読んでるわね。おっさん」

「二十六では、おっさんとはいわねえんだよ。くそばばあー。」

「黙れ、くそじじい！」

炬燵の中の陣地取りが激しくなる。

ええと。

や、やめなさい！

「とにかく、おりやあ、行つたから。」

「年どりすぎて、ぼけたんじやねえのか？いつ行つたか、言つてみろー。」

「こつつて、そりやあ、よお」

大童子が、ぴたり動きをとめた。きょときょと黒田が左に右に動く。

「あれさ。あんとき。あん時。あん時に行つたよ。おお、行つた。うん、行つた。確かに行つた。」

おい、目泳いでんぞ。

「私は、あん時の後に行つたわね。」

思わずこける。春日、お前もそれに乗つかるのか。

「あん時の後の後に行つたのが、俺の言つたあん時だ。」

「私は、あん時の後の後の後にも行つたわね。」

こゝ、やめんか。そのぬるくて醜いなすり合いで。

「てめえら。洗剤、買ひにいけつてんだろ？が。ごまかすんじやねえぞ、こゝ。」

どすの利いた声でいうと、大童子おおむねこが口を尖らせた。

「そもそも、化生が買ひ物できるわけなくね？足がねえんだぜ、化けもんてのは。」

「やうだわね。貞子のよつに匍匐前進してると、口が暮れるわね。」
いや、あるじやん足。

炬燵で今、激しく戦つているそれ。いや、それだよ、それ。
それが、足でないなら、その四本の棒はなんだよつ。

だが、まあいい。既成事実を示してやるまでだ。

「こないだ、はら屋のたい焼き買って喰つてたのはだれだ？」

春日と大童子の眉がぴくりと動いた。

交わされる三人の視線、無言のやり取り、ぎりぎりの駆け引き。
重い沈黙をやぶつたのは、とてもお手軽な感じの機械音。

ピンポーン

来客を知らせる音だ。

受信料の振込み手続きはすでに済ませてある。

越してきたばかりの、しかも学生の一人住まいとは思えない一軒家
に来客者といえば、あれだ。

寝そべっていた春日と大童子がはしごとばかりに起き上がつた。
目が輝いている。

こいつらは、新聞屋、押し売り、新しい信仰への扉の皆さんが大好
物なのだ。

うつ、悪い予感。

「俺が行く！」

「私が行く！」

「私が行く！」

二人が争うように玄関先に向かつ。

追いすがるも、廊下を駆け抜け玄関にあと一息といつてころで、突
然金縛り。

いやー。やーめーてー。

私が無駄にもがいでいる間に、事態はどんどん進展する。

「どちらさまあ？」

春日の浮ついた声がある。

「やまかげ中央新聞です！」

「はいはい、ただいま。」

春日がつるりと顔を撫でる。あつといつ間に、背が伸び妙齢の娘になる。

だが、待て。

なんでも町娘？つぶし島田、結つてるひとなんて、いないよ？

時代がちがうだろ！時代考証しろよ！

コスプレにしか見えんだろうが！

「今、あけます。」

春日はいそいそと扉に手をかける。

「こら、春日開けるな。大ちゃん、止めろ！やめーでー。」

にやりと大童子が笑う。凶悪な微笑み。

こ、こいつ。グルだ。

願いもむなしくガラス戸がからりと開いて、新聞屋のおじさんが顔をのぞかせた。

「こんにちは。やまかげ中央新聞です。先週、越してきたん？新聞

とらん？」

「家のことは、うちの人に全部まかせっきりで、ちょっと、あんた

！」

「いや、このあたりは、みんな取つてももらつるんだがねえ。」

怪しげ！明らかに怪しげ！気付いてんだろう！おっちゃん

！髪だし、鹿の子模様の着物だし。

「なんだあ？お春。」

あごをかきながら、大童子の登場。

「あんた、新聞だつて、どうしよ？」

「どうしよつておめえ、つづつづつ、うおほほほん。」

突然、大童子が玄関先に手をつく。

「あ、あんた！」

「お、おはるう、すまねつえな。おれがこんなばかりに、新聞もとれねえ。なんて・・・」

「いいんだよ。あんた。あたしは気にしちゃいないよ。」

あの・・・もしもし？

「電気屋の広告も入るよ。ここは電気屋が3種類もあるけんね。」
今、目の前で異様なコントが繰り広げられているのにおっちゃんは
気にもとめない。

「あ、あんたあ。死んだら、駄目ねー。」

「つーか。もう、死んでるだろ。」

「あと半年ね。無料だから。」

おい、人の話、話聞けよ。おっちゃんー。」

よろりと、春田が一步後ずさつた。手をついて吐血しているフリを
する大童子の耳元でささやく。

「大ちゃん。あやつ、なかなかの手だれね。」

「ああ。気をつける。ありやあ、組織の人間だ。」
「どこ」の組織だよ。

おっちゃんは、笑顔のまま続ける。

「英字新聞も出とるんだけど。どうですかいね? あと、洗剤一箱つ
けるけど、とつ」といて。」

洗剤?

洗剤と聞くなり、二人の体がピクリと震えた。

「まで。早まるな!」

私の叫びは届かない。

大童子が、うつむいたまま、おっちゃんの足をむんずとつかんだ。
機関銃トーキークを炸裂させていたおっちゃんが、初めて大童子をまと
もに見た。

「あのお。新聞読みたいんですけど、手伝つてもうえませんかね?」
「はい?」

「新聞、読みたいんですけどね。最近よく見えなくて、おかしいな
と思つたら、田玉を置き忘れたみたいで。」

「やだなー。めがねのことだ?。」

おじさん、いい突込みです。

いやー。実は今もね。探してんですよ。といいながら、大童子がゆ
っくりと顔を上げる。

「ああつあああ」

おしゃんか一歩後ずれ（た

「ほらね。俺の田玉、知りません?
探すの手伝つてもらえません
?」

「何言つてんだい、あんた。」

姫姫、ほく、町娘姿の春田が言った。そこで、大童子の肩を抱き、

いくぼみが穿たれている。

んなに、探さなくてても。「

女優として新聞屋を見上けて

「そこに生きのいののが、ふふふた！」あるじやなしがおおっちゃんが後ずさる。洗剤の箱が転がった。

二人同時に、

「新聞取るから、め・だ・ま、おくれ。」

卷之三

激しい悲鳴と、走り去るスクーターの音。

私は金縛りが溶ける。

ほうけたように廊下に座り込む私に、振り返つた二人。

あらゆる六から田に非ずから

しかも、その顔でわらうんかい！

「洗剤。新聞屋さんがくれたぜ。」

し、
しりません。

おつかさん、あんたたちをそんな子に育てた覚えないから！！！
おつかさんにもね、世間体つてもんがあるんだい。

気が、気が遠くなる・・・。

(2)

ああ暗い。夢だ。

『振り返つてはだめ。』

懐かしい声は確かにそう言つた。
おばちゃん? どこにいるの?

ぎぎつと足元が鳴つた。

古い羽目板。橋だ。

ああ、ここは、どこだらう。

あたりを見回すが、漆黒の闇。

何も見えないので、何処からともなく風がふく。
橋が揺れる。私は橋を支えている蔓にしがみつく。
気がつけば私はとても小さい。

蔓で縫われた縄の手すりをつかむのもやつと。
幼児の掌はすぐさま、摺れて真っ赤になつた。

長い袂が風にあおられて、蝶々の模様がもみくちゃになつた。
ここは、どこ?

風が止む。

心細い。

すると、目の前にポツリと淡いぼおつとした明かり。

火の色なのに、その影はとても冷たく。燃えているにも芯がなく。

右へ左へ ふうらり、ふらり。

上へ下へ ふうらり、ふらり。

それが少しずつ、最後は急に鼻先に近づいたかと思うと橋が炎に包まれた。

おまけやん！

思わずその場にしゃがみこむ。

『後ろを向いては、駄目。駄目ー。』

こわい。こわい。

体の一番深いところから絞りだすように、しづがれた声が最後は悲鳴になつて。

そつと、気配を感じて目だけを動かして左を見る。

真つ暗な闇の淵から白い指先がすすと伸びる。

手の形、それは優美だけど。まるで舞妓さんの白粉を塗った手のようこうつすらと闇にけぶるよつに白い。

そして、闇のなかから白眼のその真白さが際立つよつなはつきりとした眼が現れ、朱をひいた唇がいびつな微笑みの形でくつきりと浮かぶ。

首の下に真つ赤に染まつた襦袢。

襦袢だけを纏つた日本髪の女がこぢらに向かつていまや半身を乗り出し、手で招ぐ。

「おいで

い、いやだ！

体が強張つて動かない。

左の耳が衣擦れの音を聞く。

「おいで」

はつとして、左を向くと、黒い長い髪が板の上を這つてゐる。そこから覗くのは田じりのつた端整な顔。

「こぢらに、おいで。」

左から右から、橋の遠くに向ひつままで。

ずっとおいでおいでの大合唱。

毛むくじら、鬼火、血まみれ、黒い髪。

息が、できない。

目が、乾く。

恐怖のあまりペタリと座り込んで、少し後ろに身を引いたとしたとき。

『戻つては駄目。』

おばちゃん！

その声ははっきり後ろから聞こえた。

『振り返つては駄目！』

いや、いや。

後ろにはおばちゃんがいる。

やさしくて綺麗で強い、暖かいその人が。

しゃくりあげながら、首と肩に力を届れて、ゆっくり振り返りかけたとき。

誰かが後ろから幼いからだをしっかりと抱きとめた。

暖かい。

「おばちゃん？」

しゃくりにひっかかりながら聞く。

でも、この腕は、太い。形がくつきとしていて、筋肉がついている。

だれ？

腕の主は私の頭に掌を乗せた。

『おばちゃんは、後ろをむこうもいけねえって、言つたんだ。』

前を向いたまま頷く。

瞬きと一緒に涙の粒が落ちた。

『じゃあ、そうしなきゃあな。』

また頷く。

『さあ、行こうか。』

夢の中で私は思つ。あれは、誰だったんだろう。

弥生の「じょ。怪相（後書き）

笹ヶ根です。ライトと笑いが苦手なので、練習のつもりで書き始めましたが、なんだか、アクセス数が、『その公国、青き母に抱かれの方より、多いのはなんでしょう・・・。しかも、一話しかのつてなくて、日にちもたつた昨日から俄然増えている。・・・何故だろう。

ところで、はら屋の鯛焼きは私の大好物です。山陰の小さな市にお寄りの際は、駅のコンビニ、スーパーで探してみてください。あんこが大量に入つたのが個包装されますから。

次回は、白沢さん登場です。

弥生の「♪♪。 壱圓衆（前編）

たくさんアクセスありがとうございます。うれしくて次話更新しました。

その場所は、小さな町を一望できる。

手前にかかる神の名を冠した橋。お椀を伏せたようなドーム状の建物。

小さな町ながら、軒々と散らばる細かい明かり。それは人の営みの象徴。

その様子を展望台の丸い屋根の上から見下ろしているのは一人の男。黒尽くめの古風な出で立ち。腰には刀。

「野郎、どこに行きやがったんでしょうかね？ 気配がまつたくよめねえ。」

獲物を探る鷹のように、街を見下ろす男に、少年の声。

揃いの格好の少年は松の木に立つて、古めかしい形の双眼鏡を覗いている。

「さあてね。どうせ小物だ。夜陰にまぎれて息をひそめてりや、雑魚と区別がつきはしねえ。気配もかくせねえ程度の奴だ。殺る気分になつたら、すぐに分かるだろ。手下には、気をぬかねえよう、烽（かがり）（のろしのこと）で知らせるように言つとけ。」

「承知。」

少年は、双眼鏡を降ろした。

どこからともなく甘い香りが漂つて、男がそれに興をそがれたように空を見上げた。

「梅か。」

冬の日本海を奔る風に蹂躪され、冷え凍らされたこの土地にも、ようやく訪れた春の兆し。

少年は、男のそんな様子を横目で一瞥。

視線を街にもどして、わざとらしく続ける。

「ところで、わざから妙な気配がするんですが、俺の気のせいつすかね？」

「いや。」

にやりと男は笑つた。

「俺も、感じるぜ。」

藍の色を濃く深く染め上げたその中天に、細い月が一筋。

色は研ぎ澄ました刃のその淀んだ潔い、確かにましろ。

「あいつが、戻つてくるとはね。」

鷹のような目で、一点を見つめ、男は腰の柄に手をかけた。一部の弱さもなく鍛えられた鋼が、するりと漆の地を滑る。白い煌めきが闇に閃く。

冷たい切つ先をまっすぐに、軽く眇めたその眼の先へ。

「会いたかったよ、千秋。」

唇には残忍な微笑み。

「こつはいいお楽しみだ。」

(1)

ああ、なんてかぐわしい！

両側から、目の前に差し出されたフライドチキンにうつむいた。

「さあ、たんとお食べ。」

「心の赴くまま、その欲望を満たせ。」

にっこりと微笑む春日と大童子。

あまりのことに、言葉が胸につまつて、思わず顔をそらす。遠慮しなくていいわね。」

「田のうのストレスは食欲で、発散させるが一番！」

いや、ストレスを生み出しているのは、何を隠そう君たちだよ。

しかし、なんてことを言い出すんだ。握った小刻みにこぶしが感情

の高まりに震えている。

涙がにじんでいるのが、自分でもわかる。

「春日・大童子。」

語りかけた視線の先には、端整な顔立ちの一人が天使の微笑み。これは、罷だ、陰謀だ。

そう、あれだ。

ハ工を狩るウツボ蔓。かずら蟻をさそり地獄。

シーザーをやつた力工サル。本能寺の明智光秀。

世界征服をたくらんで、なぜか幼稚園バスを狙うショッカーだ。どん。食卓を両の拳でたたく。

「これは、なんの真似だ。」

「あれ？ 大好物じゃなかつた？」

そうだ。 そうだとも。

このかぐわしい香り。確かにスパイスと塩とぎつとぎとの油のハーモニー。油に指先を光らせながら、次のピースに手を伸ばすその時、脳内を駆け巡るドーパミン。

ああ、抗いがたい至福の時間。

頭を振る。

冷静に、冷静になれ。

ピンチのときほど冷静さが必要だ。

「な・ぜ、チキンなんだ。」

「おりやあ、たまきのためを思つて…」

「ひどいわね。」

ぎろりとその顔をねめつける。鼻先に狐色の輝きを突きつけられて、気持ちがぐらりと揺れた。必死にこらえて、声を出す。

「うそだ。」

「ほ・ん・と」

「ほ・ん・と」

「こ、こいつら。

思わず歯軋り。

なぜ、そんなに楽しそうなんだ。

なぜ、そんなに田じりが下がっているんだ。

なぜ、そんなに息がぴったりなんだ。

図つてている証拠だろうが……。

「もどつてから、食べる。」

誘惑を断ち切るよつに食卓を立つと、一人が同時に重々しく首を横に振つた。

「それは、ならぬ。」

「冷めてからいただいたのでは、『俺の屍を越えていけ』とばかりに、死んでいつたミスター・チキンに失礼だ。わかつてんのか？」

は、春日……。

確かに、こいつはミスターだろつとも。だが、冷えてもミスター・チキンはおこらないと思うよ。

「そうだ。雨の日も風の日もわが身も省みず、立つておられる白いスーツの『ご老人にも失礼だ。』

額に眉を寄せ、腕組みした大童子が相槌を打つた。

いや、やつは寒さも風も感じませんから。

偽者ですから！もうとっくに死んだおじいちゃんですから！

二人は同時に手にしたフライドチキンを見下ろした。

「そこまで、いうなら仕方がない。我らがいただこう！」

「遠慮なく、いただきます！」

結局そうかい。

もう、我慢も限界だ。というか、何の我慢をしているんだ私は。

「おい。」

唇が油でよじれた二人がわざかに顔を上げた。

「そこに直れ。今日が健康診断の絶食日と知つての無礼だな。田にもの見せてやる。」

薙刀、とつてこなくつちや。

うふ。

いつてきますと声をかけて、庭に回ると良い香りがした。

梅の木に薄桃色の花がちらほらついていた。

「あ、梅」

見送りについて出てきた春日がすぐ後ろに立っている気配がして、振り返る。

はつとした。

真剣なまなざしが黒い幹、ふくよかに膨らんだつぼみを見上げていた。

「春日？」

あわてたように目をしばたかせて春日が目をこする。

「おかしいな。ゴミがわんさか入ってるわね。木枯らしのばかやるわ！」

(2)

「おーい、たまちやん。」

健康診断を終えて構内を歩いていると、見知った顔を見つけた。皓の兄、従兄弟の武だ。

来年から、同じ大学の三回生になる。

一族のなかでは、弟の皓がクールで切れ者、この武はやわやか腹黒だと通っている。

祖母も、武は優しいのに、時々さわやかにグサツと言葉を指していくことがあるのよねと言つほどだ。

「武兄、講義は？」

「今日は、これから。4時からの講演だけ、聴けばいいからね。」

「ふーん。そなんだ。大学生つていいなあ。

「ところで、春日・大童子は元気にしてる？」

「あれら

「無駄なぐらい元氣。」

「皓の話を聞く限りだと、随分たのしそうだね。いいなあ。」

皓、いつたいどんな話をしたんだ。

とこりか、あれの一体何がたのしそうに見えたのだろう。

読めない、皓。お前の気持ちが分からぬぞ。

「あ、とこりで、たまちゃんちつて、一軒家だよね。」

「やうだけど。」

じゃあ、と言つて武が持つていた鞄の蓋を開けた。

それを見て私は目をむいた。

「た、武兄。なんて奴をなんてとこりに、入れてんの。」

「いやー。うちじや、こんな大きな物、バランス悪くてかえなくて。たまちゃんとこだと、あんな化け物に万年童女がいるから、ちようどいいかなと思つて。」

白、毛むくじやら、つぶらな目、千切れんばかりに降られる尻尾。

「・・・野良犬ひろつたら、おばあちゃんに怒られて飼えなかつたつて、素直に言えばいいと思うよ、武兄。」

どう見ても、犬だ。子犬以外の何者でもない。

「まあ、そういうことだから、かつてもうえない？」

ため息。もうよくわかんないのが家に一匹いるんだ。この一匹のほうがよほどまともで、私の心を癒してくれるかも知れない。

「いいよ。」

「よかつた、名前はもう分かつてるんだ。」

しゃがんで頭を撫でてやると、うれしそうに鳴いて、顔を擦り寄せてくる。

手を出すとお手もする。

肉球、ふにふに。

なんておつこりうなんだ。

「なんて名前？」

従兄弟の声が頭上からふる。私は、今聞いた言葉を聞き違ひだと思つて、顔を上げ目顔で聞き返す。

?もう一度。

「いや、だから。」

あせつたような従兄弟の顔。すまないね。さつき、聴力正常だったんだけど。

?もう一度。

はい?

「白沢さん?」

呼ばれて、犬は余計に尻尾だけが違う生き物では?と疑つほど尾を振りまくる。

「・・・って、だれ。」

にっこりわらつて従兄弟が犬を指し示した。

「白沢さん。」

「と、いうわけで、犬を飼うことになりました。」

春日が歓声をあげながら、手を出す。

犬は幸せそうにその手を舐めた。

「くすぐつたいわね。」

はしゃぐ春日。

「ミスター・チキン。食つかなあ?」

いや、大童子。それは私の分でしょ。

「で、名前をつけようと思う!はい!何か候補は?」

二人は、腕を組んでその小さな可愛らしい毛ダルマを見下ろした。

小さな瞳が期待に濡れている。

「そうさな・・・。可愛い名前がいいな、エリザベッタ・ジョセフ

イーヌ・マリー・・・」

「そんな、甘つたるい名前は駄目ね。長生きするよつないい名前が、いいわね。じゅげむじゅげむ五号とか、」

呼びにくいわ。つか、恥ずかしくて呼べんわ。

「いやー。スリジャヤワルダナプラコッテ。」

首都かよ。

「ウマタフアカタンギハンガコアウアウオタマテアトウリップカカピキマウンガホロヌクポカイフェヌアキタナタフ。」
山かよ。

「・・・ おい、 どうでもいいと思つてるだろ。」

口を尖らせて、 大童子が反論。

「自分が思いつかないからつて、 人に責任を擦り付けるのは、 感心しないぜ。」

「・・・ つ馬鹿。 名前ぐらいは、 考えてるよ。 先にみんなの意見を聞こうかなーと思つて。」

きやつきやと春日が笑う。

「言つてみて、 言つてみて。」

ええと、 少し照れくさい。

「花ちゃん。とか」

二人が一瞬、 真顔になつた。 続いて爆笑。

「し、 失敬だな！」

子犬の首根っこをつまみあげて、 春日が『それ』を見せる。

「たまちやん。 これ、 オスだわね。」

ぎやああああああ！

春日、 女の子がなんてことを！

「じゃあ、 なんて名前つけるんだよ。」

真つ赤になつた顔を見られたくなくて、 投げやりに言つ。

二人は、 再び犬を見て、 それから迷わず同時に言つた。

「白沢さん。」

「白沢さん。」

「！

だから、 白沢つてだれだよ。

なんだよ、 白沢！

ずっと帰り道、 もんもんと問い合わせた疑問を口に仕掛けたとき、 頭上から声が降つた。

「お楽しみのところ、 失礼するよ。」

蔵の屋根の上に男がいる。その高さをものとせず、すぐっとたつている。

白い淵飾りのついた黒い陣羽織、はかまを脛宛で絞っているのは大童子と似ている。

黒ずくめの衣装にぴったりの眼光鋭い精悍な顔立ち。

弥七か？お庭番か？それとも新手の変質者か？

「よう、久しぶりだなあ。でかいの。」

見上げた大童子。

「たしか・・・おめえは。」

相手が大童子の言葉を待っている。にやりと大童子がわらった。

「こいつ絶対、知ってるくせにくだらないこと言つ。」

「だれだっけ？俺の係累にこんな柄の悪い奴はいなかつたと思つけどな。」

「俺の顔を見忘れたとは言わせねえ。俺とお前は、かつては志を一
つにしたこともあった。しまいにや、敵同士。」

「さあて、どうだつたかね？人間に興味ないみたいで、すぐに忘れ
るんだよねえ。」

「じゃあ、名乗つてやらあ。そのボケ耳かっぽじいてよく聞きやが
れ。俺は、阿国衆・筆頭、神門忠盛かんどだ。」

隣の春田に小声で尋ねる。

「阿国衆つてなに？」

「出雲の阿国のおつかけのことだわね。」

さらりと答える春田に、神門がつばをとばして非難の声をあげる。

「こら、万年童女！かつてに創作するな！俺たちは化生悪鬼調伏の

プロ集団だ！」

「けつ。気にくわねえ男だ。」

は、春田ちゃん？

大童子がへらへら笑いながら近づき、眉間に皺を寄せて相手の顔を
ねめつける。

「せひ。で？その阿国衆の筆頭が、白毫堂々、銃刀法違反してまで何の用だ？」

「化生に、銃刀法もなにもねえ。おめえだつて、腰に挿してるのはなんだ？野球の道具もあるめえ？でかいの。」

神門がにやりと笑つた。いかにも、早く刀を抜きたくてしょうがないといった感じ。

壊れてる。

こいつ壊れているよ。

「ここのあたりにヒト斬りがうるついているといつ報せがあつてな。どこかのヒト斬りじゃねえかと探しにきたんだ。まさか、おめえじやあるまいな。」

「おいおい、そりやあ、とんだ濡れ衣だぜ。」

わざとらしく両手を広げて、大童子が言ひ。

「俺は、ここのところミスター・チキンとまつたりすゞしてたから、ヒトなんぞ斬つてねえよ。おい、犬野郎。おまえ、鼻が鈍ったんじやねえ？もうろくしたの？善良な市民と悪鬼との区別もつかなくなつたつてわけ？」

「うつせえ。どんな面して、舞い戻つてきたのか見にきてみたら、少しもかわらねえ分厚い面の皮だ。針の心臓だな。」

大童子が、ひょいと土を蹴つて蔵の屋根に上がり、神門の視線を正面から受けた。

「ほう。敵陣偵察のつもりか。おりやあ、てつきり、懐かしさあまつて、俺に祟り殺されにきたのかと思つたぜ。」

にやりと唇の端をあげて大童子が言つと、神門の形のよい外上がりの眉がピクリと動いた。

「・・・綺麗さっぱり、跡形もなく祓い清められてえのか、てめえは。」

「聞こえなかつたかね。てめえに清められるくれえなら、ふざけた顔つきでにやりと笑う。」

だめだ、大童子。完全に挑発している。

「「じつちが、てめえを三途の川の川端まで案内してやるよ。」

闖入者はやりと笑つた。

「・・・上等だ。」

「あ、あの。春日ちゃん。と、とめなくていいの？」

春日は、掌をひらひらさせた。

「あれは、じやれとるだけだがね。」

ああ、そうか。

そうだよね、知り合いみたいだつたし。

がん飛ばしあつたのが、少し離れたし。

つて、聞合いじやん。

神門と名乗つたあの男、刀抜いたよ！

あれ、真剣！ 真剣だよ。

「じやれてる？ はあつ？ どこがつ？」

「ありや、仲良く喧嘩してないトムとジエリー。若干、険悪なルパンと錢形。サルと犬だわね。」

トムとジエリーが仲良くけんかしてなかつたら、普通に敵かたき同士じやん。

サルと犬つて、相性最悪だつ。

「何、さまよつてやがる。おとなしく、あの世に行きやがれ！」

「お断りだ！」

振り下ろされる刀を、大童子が鞘さやごと抜いた刀身で受け止める。

「やり残したことがあんだよ。死んでも死にきれねえんだよ。」

神門が鋭い突きを繰り出しが、それを大童子がひらりひらりと器用に交わす。大童子の鞘が空を切つてうなる。身を翻し、突きを避けた神門が袈裟懸けに刀を振り下ろす。大童子がそれを鞘で受ける。力と力のせめきあいの中、神門の獰猛さをひそめたまなざしと、どこか楽しげな大童子の瞳がぶつかり合つ。

「抜け。どうした、刀抜かんかい。まじ本氣で、調伏あぶなづぶくすんぞ、こらー！」

神門の低い声。

神門の刀を押し返し、半歩飛び退つた大童子があざけりの声を上げ

る。

「へつ。お前にはこれで十分だ。みね打ちでももつたいねえや。」

「ちよろちよろ、ちよろちよろ、相変わらずすばしこい野郎だぜ。」

舌打ちをした神門が刀を握りなおして、雄たけびを上げて、大童子に斬りかかって行く。

あの、見間違い出なれば、普通に殺しあつてません?

再び、声をかけようと春日を見ると、今度は春日がうつむいて、垂れ下がつた前髪の下、くつくつと笑つてゐる。

は、は、は、春日ちゃん。

おねえさん、今まで一番、春日ちゃんのことが、怖いわ。

前髪の下、何かふた一つ鋭く光るもんが見えるんですけど。

それ、なーに?

矢庭立ち上がつた春日が、あらぬ方角から飛んできた光るものをつかむ。

開いて見せたその掌に一本の小柄いのちが握りこまれていた。

再びそれを握り締めると、信じられないような音がして、鉄製の小柄が棒切れのようにはぎ散つた。

いやああああ!

「あぶねえな、ふざけた真似しやがつて、餓鬼。出でこい!」

「お見事つてほめてあげた方が、いいかな。こういう場合。」

神門とお揃いの服装をしたとても冷めた目、無表情の少年が、庭に器用に着地する。

「おう、餓鬼。しばらくみねえ間に隨分とでかい口、聞くようになつたな。」

「しばらぐ見なぐても、ぜんぜん変わつてないね。進歩なしつてことかな。」

「・・・大泣きさせて、恥かせてやろうか。クソ餓鬼。」

「意宇九郎おうのくらつて名前があるんだよ。思い出せてあげようか?」

仁王立ちの春日に向かつて、十手が飛んでくる。それを器用によけた春日が、両手を突き出すと、そこから光のたまがねじるような尾

を引いて九郎の方に飛ぶ。九郎はそれをすばやく引き寄せた十手で跳ね返す。

庭石が一つ粉碎。

ぎゃあああああ！

「何、しやがんだ！万年童女！」

「からかいに来て、飛び道具投げる奴があるかね。その品のない呼び方はやめんか。」

叫び声もでない私を無視。

二組は争いをやめない。

大童子は激しく切り結んでいるし、春日は武器マニアと熾烈な戦闘を繰り広げている。

これは、悪夢だ。

だ、だれか。なんとかして。

と、傍らでうずくまつていた子犬がすくと立ち止まつた。てけてけと、激しい争いの中に入つていく。

こ、こら、危ないんだから。ポチ。花！・ジョセフィーヌ。

そうだ、名前がまだついていないんだつた。

犬は、ぴたりと止まり、こんどはすうと息を吸い込んだ。みるみるうちに子犬の体が膨らみ、巨大化する。

あ、あの皆さん。戦つてる場合じやないよ。

子犬だったそれが、牛ほどのなつたとき、もはやそれは犬とは呼べなかつた。

ライオンのような毛に覆われた体にあごひげが生えた精悍な美しい獣の顔。額に一本、胴に4本、角が生えている。それが、ぎろりと一同を見回した。ちなみに目は顔に三つ。体もいくつか。その目が

わよとわよとわよひついにて同時に一同をにらんだ。

『おこー。』

突然投げかけられた、信じられないほどのだみ声に、全員が動きを止める。

『おい、何やつとる。』

凍つた顔つきの神門忠盛が、斬り結んでいる相手、大童子をねめつける。

「おい、でかいの。あれは、まさか。」

「ああ、あれは、うちの白沢さんだ。」

言いながら、大童子が相手の白刃を押し返して、今日はしまことばかりに鞘ごとぬいた刀を腰にもどした。

「聖獸・白沢・・・・。」

春日と睨み合っていた意宇九郎が、手を離してつぶやく。白沢さんはすべての目をすっと眇めて、神門を見上げた。

『阿国衆、お前らの役目は、神さんのお膝元を平らかにする』こと。こんなところで油売つてちやいのかい?さつきから、ちつとばかし血生ぐせえ風が吹いてるようだが、かまわねえのか?追つてる野郎が動きだしてるかもしねえよ。』

笛の音が当たりに響きわたる。暗くなっている東の空にしゅるしゅると煙の柱が立つた。

「筆頭!烽です。」

九郎が、先ほどとは違ひ氣迫をともなつて神門を振り返る。

『先に行きます。』

目顔で神門が頷くと、九郎の足が地面を蹴つた。空高く跳躍する。

「またな、万年童女！」

「一度と来るな！！」

拳を上げて、春日が叫ぶ。その声に、九郎がちらりと笑って、闇にとけた。

「おい、お前は行かなくていいのか？」

大童子が、へらへらと笑いながら言うと、神門は唇を引き締めた。

「てめえ、相変わらず、強いな。」

「どうも。」

たいしてありがたくもなさそうに大童子が肩をすくめた。

「领袖はお前が気に入ってる」

「俺は忙しいんでね。戻りはしねえ。」

「当たり前だ、お前を戻らせはしねえ。」

そう、鼻でせせら笑うように言つた神門が大童子の腰のものに目を留めた。

「その封印、あの女がやつたのか。」

問われた大童子が自分の刀を見直した。

再び顔を上げたその唇には、意味ありげな微笑み。

「そうだ。」

よく見ると、刀が鐔のところで戒めがある。

「俺は自分が本当に斬りたいものだけ斬る。」

「ぬかねえ理由はそれか。」

神門は背中を向けて笑つた。

こちらに半分しか見えないその表情はどこか寂しげ。

「あの女の姿がみえねえ。」

大童子は答えない。その表情も夕闇に沈み、こちらからはつかがい知れない。

「千秋。てめえ、やつぱり護れなかつたんだな。」

ぼつりと低い声が言った。

暗がりからやつてきた風がほのかな春の華やぎを奪つて、西の淡い空へと消えていく。

てんで違う方向を見ている一人の男。

その間に落ちる深い沈黙。

「てんめえ！大ちゃんはなあ・・・！」

春日が、いたたまれない様子で、歯軋せんばかりに何か言いかけた。

私は、腕をつかんでそれを制する。

大童子が、深く心を痛めているのが分かつたから。

「うせろ。はやく行きやがれ。」

神門に背を向けて、大童子がこちらに向き直った。

「行くよ。邪魔したな。」

ともかく、てめえがあいかわらずで安心したよ。

そう笑つて、黒ずくめの姿が闇に溶けたその瞬間、大童子が再び、鞘ごと刀を腰から抜いた。

神門の居た辺りを、漆の鞘の身が風を切つて分かつ。肩が、大きくあえぎに揺れていた。

夕食の時間になつて、離れから母屋に移動。その廊下でぼんやりと外を見ている皓を見つめた。

「今日は、きっとカツカレーだぜ。皓。」

そう言つたのに答えず、皓は遠くの空を見ている。

「武兄。今日は西の家が騒がしいね。」

「黄帝東巡 白沢一見 避怪徐害 麻所不遍 模捫窩贊。」

くつくつと喉で笑うと、皓も少し笑つた。

「白沢さんがいるから大丈夫つてことか。聰子おばも、一体どこからあんなのをひろつてきたんだろうね。」
横にならんで、同じ空を眺める。

「お前、可愛がつてたからな。少し、惜しいと思つてるんだろ。」

「まさか、うちの家には大きすぎるよ、あんなの。ぼくら一人で支えても、持ちこたえられっこないよ。それに、」

母親が帰ってきた父親に、今日はカツカレー！と宣言しているのが、

小さく聞こえた。

「聰子おば、たまちやんが移ってきたら返すよつこ、預けてくれた

んだもん。」

「そうだな。」

西の空の焼け付くよつな色合こはむつ、穏やか。東の空がもうどつぱりとやみみ色に染まつてゐる。

「すんだね。」

皓が、離れて母屋に向かう。

武は離れる瞬間、甘い香りをかいだよつな氣がした。庭のつぼみが緩んでゐる。

「梅の花か・・・。」

目を閉じる。

あの人は、今、どつしてゐるのだひつ。

(4)

寒い。

夜、トイレに起きる。

寒い、寒い。

古い和風建築は水回りが寒い。

トイレを済ませたいといつ氣持しが止まりそつ。

いや、何よりも息の根が止まりそつだ。

縁側のガラス戸の前を通りすぎると、庭に大童子が下りてゐるのが見えた。

大童子は手を伸ばした。

何か一言一言、桃色の花をつけた木に語りかけて、そして、そつと幹に触れた。

花がひとつひらり、答えるよつてひまわりと落ひた。
それは、きれいな光景だった。

大童子は、

いま、あつと聴子おばを思つてこる。

おばちゃん。

花を剪定ばさみで切つていたおばが振り返つた。

梅の木があるよ。どうして？梅干を作るの？

一緒にならんで木を見上げる。

あのね、昔は、女の子が生まれたら桐を植えたもんなんだけど、いま
まじや、桐のたんすつてつくるないでしょ。

だから、うちせせせせなうつて私が生まれたときに梅の木を植えた
のよ。

桜とか、薔薇の方がいいのに。

おばちゃんは、梅の花が好き。冬が終わつて最初に咲く花だもの。

ふーん。これは、おばちゃんの木なの。

そうよ。

咲ぐの？

まだ、ちょっとしか咲かないし、ちつちやいけどね。

梅干は？

もう、たまちやんたら、そればっか。

だつて、梅干好きなんだもん。

残念、梅の実はつかないよ。

ふーん。

ねえ、たまちやん

ん？なあに？

もし、おばちゃん、居なくなつても、この梅の木が咲いたら、叔母
ちゃん思い出してね。

おばひちゃん、居なくなるの？
哀しそうにおばは田を伏せた。

・・・大丈夫、居なくなつたりしないよ。

おばひちゃんの、いつつき。

弥生の「ひ。 阿国衆（後書き）

ササガネです。昨日、世界不思議発見で山陰の小さな市の博物館が出ていてびっくりしました。数日前に行つたばかりだったの。この話も山陰の小さな市を本拠地にしてるんですが、やっぱり見知った風景を書くのはでっち上げるのより楽です。見たままですからね。今後はじもていネタが増やして行こう。観光地なので、いらした際にも楽しめるようにな！

次話「六文銭」ゲストは越後屋さんです。大ちゃんも斬ります。（斬らせます、といふか斬れ！）決め台詞も出す予定。あ、この場を借りて。小説に投票してくださつてありがとうございました。

卯月の「」六文銭（上巻）（前書き）

今回の田玉は大童子の立ち回り。

時は卯月。

水干を着た童子が廊下を歩いている。

両の目は凜として、少しの弱みも女々しさも感じられない。
見目よく、深い色合いの水干が映えるその姿からこじみ出るのは、
強い意志と聰明さ。

長い廊下をたどりながら物思いに沈んでいた少年は、視界を掠めた
白い華やぎに、つと歩みをとめ、仰向いた。

この家で初めて見る桜。

緊張で強張った唇にふと浮かぶ笑み。

強い花だと思う。

少年はきつと顎を引いて再び長い廊下を歩み始めた。

建具を開け放した部屋に何かを熱心に眺める養父の背中が見えた。
廊下でききつちりと正座をし、両手を揃えて平伏する。

「父上、千尋が参りました。」

返答待つて、己の揃つた指先と床の木目を凝視する。

「よう参った。入れ。」

今一度、深くお辞儀して、敷居を越える。

父と呼び始めて日も浅いその人は穏やかに微笑んでいた。

「屋敷には慣れたか？」

「日々心穏やかに過ごしております。父上様、母上様のお心遣い、
もつたいたくありがたく存じております。」

折り目正しく告げると、養父はかかと高らかに笑った。

「そう、硬くならんでもよい。きてもううたのは、他でもない。こ
れのことじや。」

差し出されたものを見るや、少年の色白の頬に朱がさした。

「これ・・・父上様、何ゆえこのようなものがお手元に？」

それに答えず養父は微笑んだ。

「ようできておる。見事な大童子の面じや。」

それがほめ言葉と理解するのに、一瞬遅れた。

思わず、平伏。

養父は武士だが、手遊びに面おもてを打つ。その面は稀代の物として知れ渡つている。

それを見よう見まねで打つたもの。

人に見せるなど露とも考えずに。

「ありがとうございます。」

「もともと面と言つものは僧、神官が打つておつた。これは器である。人の喜び、鬼人の情念、女子の哀しみ、神の寿ぎ、舞人の心。人に語りかけ、時には手を差し伸べる、それは神仏の像と同じほどに奥の深いもの。そなたは、神官の子ゆえ、数多の面おもてに触れる機会があつたのであらう。また、その道理がおのずと知れているのであらうな。この面おもてには力がある。少年の清廉さもある。まつすぐな心根がわしにもわかる。」

「恐れ入ります。」

「わしは、良い子を養子としたものだ。千秋の家に恥じぬそなたは良い童である。当家は、文武両道の家。よき武士となるべく、これからも日々、精進励まれい。」

喜びを噛み締めながら平伏したとき、庭が騒がしくなつた。

下男と何者かが言い争つているのだ。

父が眉間に皺を寄せて、刀を手に取つた。何事かといぶかりながらそれに従う。

「失礼つかまつる！」

騒ぎの主がどうやら庭まで回り込んできたらしい。

「それがし、不貞のやからではござらぬ。刀鍛冶、宗由むねよと申すもの。」

「その刀鍛冶が、いかがなされた。」

養父をかばうように片膝をついて、相手を見据える。

男が少年を見て、まぶしげに目を瞬かせた。

「そこもとは、千秋殿の」養子、千尋どの」やれりつか？」
思わず親子で顔を見合させ、それから頷いた。

「いかにも。」

なんと、とつぶやいて刀鍛冶は腰を抜かしたようにその場に崩れた。

それでも、顔だけはこぢらを見据え、決意を秘めて言った。

「こたび、それがしは主上の枕に御立ちになられた八幡様のご託宣につき、巷を騒がす悪鬼化生、鬼女紅葉討伐のため、刀を打つ事と相成った。ついては、八幡様のご託宣につき、千秋家嫡子、千尋どに、その相槌をお頼み申したい。」

桜の花がひらりと舞う。

卯月のことだつた。

(1)

ああ、なんていいお天氣なんでしょう。

久しぶりね。

空が高いわ。

雲がものすごい風であおられているわ。

西の空がくれかけているの。

からりと開いたばかりのガラス戸をまた閉じた。

「寒い。」

玄関先で一人ならんだ大童子と春日が重々しく首を振る。
おおむねいこはるひ

「いけ、いくんだ。」

「おいしいアゴちくおでん食べたいなあ。」

言いたい放題言つて、二人は奥の間に戻つていく。

4月。

それでも山陰の町は寒い。

土鍋をしまつ前にみんなでおでんを食べようと言つてになつたの

だ。

「ふあい。」

肩を落として玄関をあけると、見知らぬ老人が目の前に立つていて思わず一步退く。

それにあわせて、爺さんも一步踏み込んでくる。
ち、ちかい。ちかいよ、じいちゃん！

当のじいさんはにこりと笑う。

「わたくしめ、お隣に越してまいつた越後屋藤衛門と申すもの。」「越後屋さん、ですか。」

『ふつはははは、越後屋そなもなかなかのわるじやのう』『いやいやお代官様の方こそ・・・』あの場面が、高速回転的速さで駆け巡る。

「これは、ほんの『挨拶のしるし』でございます。」

差し出されたのは紫の包み。

反射的に受け取つて感じる確かな重み。

・・・つてこれつてまさか。

「ええつ！ええつ？

こ、これつて。

小金の饅頭つてやつじやないのか？

「どうぞ、『遠慮なさらず。』ところで、わたしはさみしい老人の一人暮らし。このあたりのこともよくわかつておりません。お食事がてらこのあたりを案内してくだされば、それ相応のお礼を・・・」つていうか、ちょっとまで、それは一体・・・越後屋が言い終わらないうちに、家の中から春日の低い雄たけび。
私も、もはやこういう展開に慣れたもの。
振り返らずよける。

春日の手から放たれた閃光が越後屋の足元に着弾する。

「な、なんの真似ですかっ。これは！」

あわを食つて越後屋が叫ぶ。

「なんだって、かまやしないわね。」「

バキバキと手を鳴らしながら春日が眼光鋭く家の中から現れる。

春日ちゃん、目がね。

とても楽しそう。

「うちの可愛いたまちゃんを、鬼畜外道の裏街道に誘っこもつとす
る奴は、容赦しない。それだけだわね！大ちゃん！」

呼ばれてうれしそうに大童子が出てくる。

「おう、たまき。しらねえ人から物をもらつちゃいかんつて教えた
だろ。タダほど高いものはねえんだぜ。」

「いや、君にそれを教わった記憶はないぞ。」

「さあて、じいさん。」

ぎらつく目で、爺さんを見据える大童子。相変わらず、人の話きい
てねえよ。この人。

「まだ、たぶらかされてない。」

自らの名誉のためにも一応訂正を入れると、大童子も言い直す。

「よくも、うちのたまきをたぶらかしかけてくれたな。」

春日とふたり顔を見合させてにやり。

「たまちゃん！行つて来て、こいつはわたしらでしめとくから。」
庭からはじけ飛び出してきた白沢しらさわさんがなにを思つたか、尻尾を振
つてきやんきやん吠え立てる。

「ああ、いくよ。もう。」

しぶしぶ、家をでて、お茶の垣根を回つたところで足を止めた。

どこかで見かけた黒尻くめが佇んでいる。

鷹のよくな危険な目。神門だ。

物言いたげな顔に気がついたが素通り。

「つて、通り過ぎるんかい！」

みえない。

「おいつ！」

みえないよー。みないんだもーん。

「おいつー。」

祟らぬ神に祟りなし。

「そこの鈍感野郎！」

し、失敬な。

わざとらしく、たつた今気がついたように、田を大きべする。

「あ、出雲の阿国のおつかけ。」

ぴきつと音がするように神門の額に血管の筋が浮いた。

「だれがつ。」

あんただ。

「今日は何？ ひとんち伺いやがつて。お前は、うちの大ちゃんのストーカーか。」

「だれが、あんな奴ストーキングするかつ。」

おお、こわ。ムキになるところが、からかいがいがあつて面白い。いい楽しみをみつけたかも。

「じゃあ、早く用事言いなよ。あいにく買いに行くんだから。」

まあ、千秋がついているから、大丈夫だとは思つが。そう一人ごちる様に言つて、神前は続けた。

「お前はいろいろ惹きつけやすい体質だからな。一応注意しておくぜ。このあたりに、魂魄斬りが出てる。俺達は、ヒト斬りと呼んでる。ヒト斬り、義一郎だ。もう、三人やられた。気をつけな。魂に傷がつくぜ。」

言つて、鷹のよくな面目を神門はさらに眇めた。

買い物から戻つてくると、土間に草履がきちんと揃えておいてある。

その横にはじつい和傘。

晴れてるのに、傘ね。

結局、越後屋との騒動はおさまつたらしい。

炬燵の部屋から笑い声が聞こえるので、ふすまを開けると一人の化生と越後屋が談笑していた。

「ああ、お帰り。たまちゃん。」

「あー」ちぐ、かつてきたか？たまき。「

紅い顔のふたり。

もしかして、酔っているのか？

炬燵の上には煮えた鍋とカセットコンロと、徳利と杯。

なんだか、酔っ払いのぱしりに遣われたようで、なんといつか・・・

言葉は汚いが、胸糞悪い。

「買つてきたよ。しじうがもね、」

「おおよし。ま、そこ座れ。」

いいよ。いいよ。

もう始まっちゃってるなら、しじうが摺つてくるし、アゴちく切つてくるよ。

ちよつとふてくれて、立とつとすると、越後屋が杯を差し出した。

「まあ、まあ、いっぱい。」

反射的に私の眉がぴくと動く。

「越後屋、だめだわね。この時代は未成年の飲酒は、」法度なんだよ。」

春日がわれつの回りない口調で言つ。

・・・ビジュアル的には、君もいかんはずだろつ。

「こんなに大きいのに？」

「昔と違つて、今の子は精神年齢が低いってことだがね。さあ、越後屋、」

「はい、ただいま。」

なれた手つきで、越後屋が春日の差し出した銚子に徳利を傾ける。

「ささはよいのぉ。」

ご機嫌な春日。

「まあ、大体五年ぶりぐれえか。」

そしてやはりご機嫌な大童子。

「手前など、いただくのは百年ぶりでござります。」

「そうか、越後屋。おめえも苦労したんだな。」

「いいえ、いいえ。大童子様ほどでは。」

「

つて、ちょっとまで。

なんかおかしくないか、この会話の流れ。

「はつきりしておこう。越後屋。」

「はい？ 小首をかしげて罪のない顔でこちらを向く越後屋。

「答える、お前まさか。死んでる奴か？」

なんだそんなことかとばかりに越後屋の頬が緩む。

首の包帯をとつて頭を持ち上げる。

ぎゃああああああああ。

き、傷口が。

「さよう。手前は、三百年ばかり前に死んでござります。」

・・・や、やはり。

「もう、死人、化生、余外の者はたくさんだ！ 即刻、でていけ！」
ええつ、そんな無体な！ と越後屋が身を縮めると、一人の化生が私
を押しとどめる。

「まあまあ、楽しくやらひじゃねえか。」

「近所づきあいは大事ね。」

近所に越してきた人々をみんな祟つて、追い出した奴がよく言つ。
おかげで家は、幽靈屋敷呼ばわりされてるんだ！

はたと気がつく。

「大童子、春日。」

杯を口元に運ぶ手を止めて、二人はこちらを向いた。

「まさか、君たちなにか、越後屋から何か受け取つてないだろ？ な
ー！」

「一人の目が丸くなる。

「まさか、小金の菓子折りなんぞ、持つてないだろ？ な！」
きょときょとと動く視線。わかりやすい。分かりやすすぎる。

「目が、泳いでんぞ！」

そこにすかさず越後屋が一言。

「まあ、大童子様もなかなか隅におけないお人でござりますねえ。」

「いやー。春日もなかなか。」

大童子に言われて、春日が越後屋に向き直る。

「いやいや、大童子。越後屋こそ、なかなかの悪だのう。^{わる}」

「春日さまには、手前など、とてもとても及びますまい。」

ふははつ。ふははははははは。

目だけでこちらの様子を伺つてゐる三人。

こ、こいつら。

笑い倒してごまかす氣だ。

(2)

「私は、海産物を扱う江戸の商人でございました。^{あきとど}」

越後屋が昔を懐かしむようにぽつりと言つた。

春日が酔いつぶれて眠つてゐるし、私も随分眠くなつてひりひりつらしている。

大童子はたいして顔色もかえず、手酌で杯を傾けていた。

「親からもつた時の店は小さいもんでしたが、それを少しづつ広げて、大きくしてしまいには江戸一番の大店になりました。^{おおだな}」

くいつと杯をあおつた大童子が、ちらりと越後屋に視線を投げた。

「そんな大店の主人が、なんでこんなところでさまでよつてやがる。押し込み強盗に斬り殺されたんでござりますよ。」

事も無げに、けれど確かに感情をこめて越後屋は言つた。

手前には、昔から懇意にしているお侍様がいらして、名を斎藤 義兼様とおつしゃいました。代々与力のお家柄で、手前どもとは先代が斎藤様に揉め事をおさめていたいた折よりのお付き合いでございました。奥様は美千代様とおつしゃつてそれはお綺麗でしたが、お体の弱い方でございました。跡目をお継ぎになるご嫡男もおわして、名を義一郎様とおつしゃいました。ところが、些細なことから、

お上の方々のご不興を買ひ、齊藤様のお家は改易。齊藤様はお役どころか、家屋敷すらも手放す羽目になつたのでござります。奥様のお嘆きはひどく、お体を壊しておしまいになつた。そこで薬代が嵩んで、齊藤家の家計はもはや火の車。そこにつけて、義一郎様が齊藤様に反発なさる。はたで見ていて地獄のよつてございました。

齊藤さまはがんばつたんでござります。誰に笑われよつと一切気にせず、傘貼り、爪楊枝の内職。なんでもなさいました。楽しみといえば、月に一度、手前と碁を打つて酒を交わすことぐらい。そうご本人はおつしゃつていました。

とつとつある日、『ご自分のお身柄がご家族に迷惑をかけているのはと胸を痛めておられた奥様が、ご自害なさつた。

あとを追つよつて、齊藤様が胸の病でお亡くなりになつた。

義一郎様は姿をお消しになつていましたが、次に現れたのは、弥生の終わり。手前の枕元でございました。道を踏み外しになつて、押し込み盗賊の一昧になつておられたのです。

一家は皆殺しにされ、手前も、金のありがちを言つ前に、仲間割れのあおりを食らつて斬られました。

義一郎様は、手前のことを恨んでおられるのです。まだ、奥様が生きていらつしゃつたころ、義一郎様は悪い仲間と遊ぶようになり、遊ぶ金ほしさにゆすりの真似ごとをなさつておられました。

手前がそれを見かねて、齊藤様に申し上げた。すると、齊藤様はひどく激昂なさつて、ひどく義一郎さまをお叱りに。

これをきっかけに、齊藤様は、義一郎様までも仕官のあてがないようでは、一族が日の目見ることもないと、義一郎様を商人にしようとお考えになりました。

義一郎様には、手前が知られぬように奉公先をあてがいました。けれど、すぐに逃げて戻つてこられました。齊藤様は、今度は僧侶にとお考えになり、また寺を紹介しましたが、それも嫌と。

奥様の「心配はそれがもとでひどくなられたのかもしません。義一郎様の荒れようはひどくなり、手前のところにも、金の無心に来られたこともありました。

けれど、わたしは義一郎様に恥をかかせる形で突っぱねました。

『武士は食わねど高楊枝』

そう言って、齊藤様のことを笑つた者もおりましたが、何がいけないんで「じぞこましうか。

手前は誇り高く、何があつても間違いを行わない。手前は、齊藤様を心から尊敬もつしあげておつたんですよ。

手前の「都合主義だとは、思いますが、義一郎さまにもそれを分かつてもらいたかった。

けれど、義一郎さまには、それがてめえの稼いだ金の上に胡坐を搔いた強欲商人の高慢とおもわれたんでしょうね。

押し込みに入られたときに、そうおっしゃつておりましたよ。

(3)

「おー、越後屋。」

呼ばれて、越後屋は顔を上げた。

「おめえが『齊藤様』『齊藤様』とあんまり二者の話をするから、『齊藤様』が呼ばれてきちまつたじゃねえか。」

言われてみると縁側に男がきつちりと正座している。出で立ちは華美ではないが、鬢はきちんと撫で付けられているし、折り目のついた着物。そして、その誠実さを表すように男は両手をついて越後屋に頭をたれた。

ああ、齊藤様、どうぞ頭をお挙げくださいまし。

あわてて、越後屋が両手を振った。

「大童子さま。」

大童子が目顔に答える。

「齊藤様は、先刻より何事かおつしゃられているよつなので、」
「ですが、はつきりとは聞き取れぬのです。なんとおつしゃつて
いるのでしよう？」

大童子が静かに杯を置く。

「愚息が大変なことをしでかしたようで、是非詫びたい。恩を仇で
返すような非道の振る舞い、申し訳が立たぬ。いくら詫びたところ
で、取り返しがつかぬ。」

大童子の声が、齊藤の言葉をつむぐ。

「ついては、そこの・・・って俺か。」

大童子が立ち上がり、齊藤の方のそばに歩み寄つた。浪人は大童子
を見上げて、何事か熱心に言い募つてい。大童子の眉がぴくりと
動いた。

「齊藤さん、それは、父親のあなたの仕事だらうよ。」

齊藤は静かに首を横にする。

「そうか。あんたはちびつとしか、こちら側には這い出してくれる」
「とができねえつてことだな。」

決意を秘めたまなざしは、相変わらずひたと大童子を見上げたまま。

「あなたの愚息をそちら側に熨斗つけて、送り返してくれだと？」

大童子は大きくため息。

漆黒の髪をさわさわと搔いた。

「しようがねえ。だが、その依頼、タダでは物理的につけられねえ
ぜ。」

大きくうなずいた浪人は、ふところから札入れを取り出した。

「気持ちわるい・・・」

両足を炬燵につつこんだ春日が炬燵にアゴを預けてつぶやいた。

「頭が、鳴り鐘みてえだ・・・」

同じくだらしない化生がもう一匹。

「お前ら・・・飲まない奴にとつては、異臭の塊だぞ、わかつてん

のか？」「

言葉を荒げると、一人は何か言いかけて今度は「「つぶり」」とばかり両手で口元を覆つ。

「わかった、わかった。何もいわんからまちがつても吐くな。な？私は、この越後屋を隣に送り届けてくるから、な？」
かつて出したことないほどのやさしい声で言つて、やわやわとふたりが頷く。

それを見届けて、ひとり管を巻いてこの越後屋をせきたてる。

「越後屋さん、起きてくださいよ。」

一日酔いつて、呑み助に落ちる天罰だと思つていたが、周りにもこんな迷惑かけやがつて。

ていうか、なんで死靈の癖に重さがあるんだよ。

ぶつぶつ文句を言つていると、よろよろと瞼を開いた越後屋が

「環さま、いつかこのお礼はきっと……」

「……だまらっしゃい！大判小判ばいめん！」といふ。

どうにかしてたどり着いた隣家はがらんとして殺風景だった。

・・・たしかに、こいつは亡者だから生活用品なんて要らないかもな。

そんなことを考えて、こいつをこのまま転がしたままにするべきか、それともあるかないかわからないが、布団ぐらに敷いてやつたほうがよいか迷う。

次の間に行くと、碁盤がぽつんと置いてあつた。

ふすまを探して視線をさまよわせていたが、とたんに身がすべり、うなじの毛がちりちりと総毛だつた。

おそるおそる振り返ると、意識もつひとつとした越後屋に今、また切りかかろうとする若い男。

かつと見据える眼球をはめ込んだ眦は怖いほどに元気で、酒は憎悪にゆがんでいる。

髪はぼさぼさで、アゴの不精ひげがだらしない。

抜き身の白刃からは、少しにじつた紅い色。

私は、直感的に察する。

越後屋に向けた憎悪のまなざし。そして、昨夜の侍に似通つたおもぞり。

ゆうじと顔が一ひかりを向く。

知つてゐる。

ヒト斬り 義一郎。

卯月の「」と、六文銭（上巻）（後書き）

ササガネのおでんにはしおががりますつてどんなあとがきだよ。
アゴちくはこの地域の名産です。

取り合えず一話完結を目指しているササガネなのですが、今回は長くなつたので、上下に分割！

どうが、どうか。下もよんでもください。まし。

卯月の「」六文銭（下巻）（前書き）

下巻、ついに大ちゃんの白刃がつなります。

（4）

碁盤が一つに割れた。

どんだけ切れるんだ、その刀！

斬鉄剣かよ！

「どけ、小娘！」

「いやだ！越後屋さんは斬らせない！」

立ちはだかって両手を広げる。

へひひひへひつと義一郎はわらつた。目が据わつてゐる。

危ない。あつちの世界をのぞいちまつた目だよ。逝つちまつてるよー。

「きりやあ、しねえ。痛めつけて金のありかを聞き出すだけだ！」

「もうやめなよ！越後屋さんを斬つたところで、お母さんは戻つてきたりしない！あんただつてもう死んでるんだ。それぐらい、分かつてゐるはずじゃん。それにあんたは、知らないだらうけど、越後屋さんはあんた達がこまらないように、奉公先の口まで作つてくれたんだよ！」

「…環さん！」

いいんです、と越後屋が首を振る。

「わたしがこの人に斬られてやりやあ、この人だつて氣がすむ。」

「越後屋さん！」

私が、前に出ようとする越後屋を押しどじめよつとしている、突然、義一郎がケタケタ笑い始めた。

「知つてゐる。知つてたさ。とつて」

え？

「逃げ出してきたときに、口利きやのじいさんが教えてくれたさ。でもよ、そんなおりやあ、関係ねえ。」

それこそ性根の腐ったようなぞつとするような顔で、にやりと義一郎が笑つた。

「金が欲しいんだよ。おりやあよ。こここの隠してる金がほしい。こここの悲鳴がききてえ。俺を商人にしようとした母親や父親なんぞ、関係ねえ。俺を自分と同じように、ひいひい金稼いで生きていくように仕向けようとしたこいつを痛めつけてやるのは、ちつとばかし楽しいだらうよ。ええ？」

「あんた、頭おかしいよ。」

「おりやあ、侍だぜ。士農工商のてっぺんだ。だが、ここのはどうだ。俺より身分が下の野郎だ。侍が商人切り殺して何が悪い。俺に泥水飲ませようとした罰だ。無礼うちだあ。」

「馬鹿だよ。あんた。」

さつと男の顔に怒氣が昇つた。越後屋が、たしなめるより私の袖を引く。

「いまじや、士農工商なんて、誰もいわねえよ。時代遅れなんだよ。そんなのあんたが威張れるネタでもなんでもないじやん。」

「なんだと？」義一郎の頬が痙攣のよう引きつった。

「だから」私は持つてきた越後屋の和傘を視界の隅に捕らえる。

「団体でかいくせに、世間知らなさ過ぎるんだよ。ばーか」奇声を上げて、義一郎が刀を振り下ろす。すばやくそれを受ける。

これ、木でできてる奴だつけ。

ああ、600円ぐらいのいやもつといい奴で、金属でできているのがあればよかつた。

ああああ、でもいい奴は軽量仕上げだからもつとやばいか。じゃあ、まあいいか。

そんなくだらないことを散々考えたのは多分、状況をあまり理解したくなかったせい。

手の中で握り締めた傘は今にも折れそうだ。

やばい。やばいかも。

亡者の刀で人間の肉つて斬れるんだろうか？

そう思つた瞬間、男の体が横に吹つ飛び。

「何をしとるかね！刀では肉は斬れないが、魂魄に傷がつく。たまちゃん、魂が死ぬよ。」

心に思つた疑問を答えてくれたのは、庭に仁王立ちした春日。

「なんだ、貴様！」

「小娘やじいちゃんを手にかけるような、性根腐つた下種野郎に答える名なんぞないわい！」

春日があざけりを受け、突き破つたふすまから這い出した義一郎の目がさらに、狂氣をはらんでいる。

雄たけびをあげて、切りかかる男に向かつて、手を突き出した春日の頭上を飛び越し、男の剣をまつすぐないだ一陣の風。

「大童子！」

「昼間つから、押し込み強盗たあ、ふてえ野郎だ。」

大童子は、涼しい顔で鞘に収まつた刀を腰に戻す。

「だいちゃん！」

「春日、越後屋とたまきを頼む。」

まだ戦闘態勢を崩さない春日に、大童子が微笑みかけた。左手が刀の柄にかかる。

鞘から切羽が外れて、金属が小さく鳴いた。

伯母が封印を施した刀が抜けたのだ。

するりと重い金属が木を滑つて白刃がひらりと迷いのない弧を描く。久しぶりの感触を確かめるように、大童子がそれを優雅に一振り。義一郎がまぶしさに目を眇める。

「少しほ骨のある奴が出てきたな。」

「死んでる奴に骨なんてねえよ。」

へつと大童子が鼻で笑つた。

「たまきはよ、商いはいやだ、坊主はいやだ。我慢や辛抱の仕方もしらねえくせに、てめえのためにあくせく働く親父を馬鹿にしゃがつて。士農工商だなんて、何の努力もしねえで手に入るもんで、威

張り散らかしているあなたの性根が腐つてゐつていつてんだよ。ば
ーか！」

「なんだと」義一郎が歯軋り。

「おまけに、やつてることは、タダの強盗じゃねえか。あの世にも
いけねえで、なつたのは弱いもの選びのヒト斬りたあ、大した『お
侍さん』だぜ。お父上は泣いてたねえ。誇りを持てという意味で、
侍の生まれを諭したつもりがとんだ裏目だと。」

「親父に会つたのか！」

「おお、怖え。おうよ。おめえをあの世にやつてきたら、説教くれ
てやると息巻いてたぜ。」

いつもの軽口はそのままに、その目はひたと義一郎を見つめて大童
子は言った。

あれは、笑つてない目だ。

「あの、くそ親父い！」

鬼の形相の義一郎が大童子に激しい突きを仕掛けしていくが、それを
ひらりひらりと大童子が交わす。大童子のすばしこさのせいで、義
一郎はほとんどともに手が出せない。子供と大人が戦いつている
みたいだ。

声を上げて振り下ろされた義一郎の剣を、大童子が力強くはじき返
した。一人の間合いが広がる。ほんの小休止。

「親父は・・・俺をいくらで売つたんだ。」

「よせやい。そんなうすぎたねえ、話。」

大童子は息すら乱していないのに、義一郎は肩を大きく揺らしてい
る。

「親父はいつもいつもそつだ。俺のやろうとすることに邪魔をしや
がる。義理だ、忠誠だ、誇りだ、情けだ。そんなもんに振り回され
て、大事を成せない臆病な男だつた。傘貼りなんぞ、反吐がでらあ。
武士の面目丸つぶれだ。俺は、そんな小物になんぞ、なりたくないな
つた。」

「そうかい？おめえの親父は、いい奴だつたぜ。」

三分間しか、話せんかったけどな。

傘貼りなんぞ、反吐がでらあ？親父がそれをしたから、おめえは食つていけたのに、その口でよく言つねえ。

にやりと大童子が笑つた。

「おめえの親父は、越後屋の話しを聞く限りにや。妻子友人守るためなら、どんなことでもするような男だ。おめえの言う通り、女房、子供食わしていくためにや、面田やプライドなんて関係なかつた。だが、人間の誇りは忘れなかつた。あつたけえ血だつて流れてる奴だつた。だから、おめえの親父のまわりにや、いつだつてヒトがいつぱいだつた。」

虚を疲れたように、義一郎が口を開いた。

「越後屋だつてそんな奴の息子だから、多少根性がひねくれ倒しても手を差し伸べてやろうと思つたんだ。男が惚れる男つてのは、そういう奴なんだろうねえ。越後屋が心残りであちらにいけねえつてぐらいなんだからよ。」

だが、おめえはどうだい？

「自分の手で自分を食わしていくつて意志もねえ癖に、プライドばかりはご立派で、人間の誇りも金縹り捨ててやがる。みてみろい、親父とてめえとどつちの死に際が全うだつたよ？てめえは、たしか押し込み強盗やつたあと、仲間割れで争いになつて斬られたんだつたよな？」

ぎりぎりと歯軋りをしていた義一郎がきつと顔を上げた。

「誇りだの、プライドだの。そんなこと親父も世の中の教えてはくれなかつた。」

義一郎は再び、大童子の返答を待たずに斬りかかって行く。その刃を大童子が受け止めて、鍔で競り合いになる。

「ばかじやねえのか？おめえ。分別のついた大の大人が、そんな屁理屈をいうことは許されねえんだよ。」

大童子はもう笑つてはいない。

「息の吸い方にも、歩き方にもしろ、何から何まで親が教えてく

れるわけでもあるめえ。足りねえ分は、てめえが両の目をしつかり開いて、見て、聞いて学んでいくことだ。親の背を見て子は育つといふが、その目がひねくれてちや、見えるもんも見えやしねえ。」大童子が一瞬口を開じた。義一郎の握り締めた拳が怒りでわなわなと震えているのを確かめて再び口を開く。

「何から何まで親父や世の中のせいにして、てめえとちつとも向き合おうとしねえおめえが、そのいい例だらう。わかつたら、迷わずあの世に行くことだな。あの世で親父が待ってるぜ。」

いやだ。

うなるように義一郎が言った。

「この世の中、みんな道連れにしてやる。血の華をさかせてやう。

」

おもしけえ。

大童子が懐に手を差し込んだ。手には、義一郎の親から受け取つたもの。それを義一郎の足元に投げた。

いぶかるようにあげた視線に冷たく大童子が言い放つ。

「六文銭。三途の川の渡し賃だ。向こうについたら、渡しの婆がいるから渡すといい。」

はじめられたように義一郎が切り込んできた。

「これだけ、言つても分かねえんなら、しようがねえ。ちつとは痛え目に会わしてやらあ。」

大童子が身を低くかがめた。義一郎の太刀筋をかわして、一部の迷いもなく放たれる鋭い白刃の煌き。

凍つたような表情が、しんじられないとも言つよつにあたりを見回した。

横顔だけをこちらに向けた大童子の唇がかすかに動く。

天地万物の逆旅、光陰百代の過客。じいじい、浮生夢のじとじ、

目を射抜くようなあわ立つ光。

大童子はまぶたを伏せて、露を払うように、刀を一振りないだ。光が霧散する間際に、何かがからんと音を立てて落ちた。

おもて
面だ。

眼窓、落ち窓、目だけは見開いて。それでも何やら物言いたげな

その表情。

「瘦男。」

ぽつりと傍らの春日がつぶやいた。

「生類殺生の亡者の面。」

哀れなもんだ。

面を拾いあげ、確かめるように指で撫でて、大童子がつぶやいた。

「親父にケツひっぱたいてもらつて、きつちり叱つてもらえ。」

(4)

「で、なんで？」

我が家の座敷。そこにできた陽だまりに碁盤が出ている。

春日は傍らで、寝転がり、丸くなつて眠つてゐる。

悪びれない表情の二人に私は声を荒げる。

一人はにやにや顔の大童子。もう一人は文句の付け所のない好々爺。「当家の碁盤は使えなくなりましたので、ここで打たせてもらつことになりました。」

ああ、そうそう。使用料は大童子さんに払つてますから。

一部の文句もつけさせないとばかりに、二人ともが完璧な微笑み。いや、そういうことではなく。

「どうして、成仏しないんですか？越後屋さんつ。」

くすくすと老人は笑う。

「いや～。隠した金を使い切るまでは、どうにも往生できなくて。」

「でも、大判小判じや使えないでしょ？」

大丈夫。

にやりと笑つて懷に差し込んだ手に、かの有名なブランドの財布。

「や、それは、ヴィト・・・・。」

ぶ、分厚い。越後屋、この世にのわばる氣、満々だな。

見上げてくるのは罪のない笑顔。

「巷では、これがはやりと聞きました。手触りは悪くないですがね、この世の藩札も鑑札も手にいれて・・・」

「？鑑札？」

差し出したのは住基カード。

越後屋簾衛門。

君は住民登録したのか？というか、できたんか？

「いや～この世はやはり金次第ですねえ。」

ふほふほど高笑い。

こんなやつ、居ていいんだろうか。

そう思いながら、視線をずらす。

主のいない座布団があつて、その傍らに徳利と杯。

ああ、そうか。

私は思わず口元を緩める。

供養なのか。私は少し越後屋を見直す。

「越後屋さん。」

はい？と小首をかしげる越後屋に私は問う。

「晩御飯、食べてく？」

深い深い闇。

夜よりも暗い色に染まつた闇の底。

たゆとう水辺にゆれる屋形船。

いびつなほどの鮮やかな色が浮いている。

桂に

流れている。

赤地に金の模様をちらした桂を上に単を重ね、紅の袴をはいて、下には潔いほどの白い小袖。

装束を見るかぎり公家の女房おもてといったところか。白い両手がそつと手元の面にふれて、女のその紅袴ほどに朱い唇が笑みの形を描いた。

くつくつくつと深い闇のじじまを震わせる笑い声。流れる水も凍るほど、冷たい響き。

女は笑いをやめて、再びその面をみた。

二つに分けた髪が幾筋か額に垂れるもおどりおどりしく。かつと見開いた金泥きんねいにはつよい意志。

ひそめた眉は苦痛と怒りの形。

嫉妬の言葉を口にせんとばかりにひらいた大口には哀しいばかりの牙。

一本の角に秘めたるは禍々しい異形の力。

その面は完璧に醜く、また完璧に美しかった。金泥の瞳をひたと見つめる女。

その顔は端整で、はつとするほど黒田がくが。笑みを浮かべる口元は形よく、上品。

女は面を裏返した。

それをわずかに仰向けた顔に当てる。しのびやかな笑い声。

闇も凍るほどの。

水辺をすすと紅く染まつた葉が滑つていく。ここに、春など来ない。

決して、来はしない。

ササガネです。

先日、お越しあそばされたいろいろな国の神様が帰つていかれました（26日）。神去出かみいりだしというそうです。この日は、聞いた限りは神様が上空を行きかつてありがたうい感じかなとおもうのですが、この地域では物忌みをするそうです。

考えてみれば、ササガネの地元は西日本の東より南の地域なのです。が、ありがたい日には半物忌み的な感じがありました。たとえばお正月。少なくとも元旦は、初詣以外は外出禁止。火、刃物類は断じて使つてはならず、ツメキリも禁止されておりました。晴れ着にはしゃいでいると怖い顔をされた物です。来られた神様に怒られると、遊んでいいのは翌日からつて。

ありがたや、おそろしや。

今回、お話はどうでしたか？

少しずつ、大ちゃんの過去を絡めて、敵ボス襲撃しゆげきとかも入れていきますね。

現世^{うつしよ}は天地を満たすあらゆるものにとつて、
通り過ぎる仮初の寝床みたいなもの。

月日は永遠の旅人で、
儻い一生は良くも悪くも夢のよつ。
喜びを味わう術なんてあつたのか、
本人にも分からぬほどに。

白露城址の一端に城山市の資料館がある。

白露城の従える『城山の杜』は桜こそ賑やかだが、まだどこか寒々
しく芽吹きには少し早い。

「東風より参つた災いの種^{じゆ}が、西に根付いて今その芽を吹^ふこうとしている」

窓から身を乗り出すよつに西の方を眺めていた女がつぶやくよつて
言つた。

書庫から資料を運びこんできた少年がそれを聞きとがめて、怪訝そ
うに眉をひそめた。

「ひどいことになりましょくか？」

「それはどうかしら。まだわからないわ。城山が無事ならそれでいい。^{そら。} まだ、新しいお守りは決まっていないのだから、お前、墨^{すら。}をすりなさいな」

言われて少年はおとなしく墨を擦り始めた。

そのすべるような所作は、見た目の年のころと比べてどこか不釣合
い。

「阿国衆の筆頭は、三輪から移つて参つた者ね」

「神門忠盛。出自はこの辺り。向こうに居て、場所替えて戻つて参
つた次第です」

そう。

女は手元の扇子を所在投げに弄んでいる。

「十三参りのあの晩に、縁の糸を結んでやつた者も、一からりに移つてきただし。あの童子は、また一からやり直さなくてはならなくなつたけれど、きっとあきらめないことでしょう。たのもしこ」と

「介入なさるか?」

少年が墨をする手を止めた。あたりには深い芳香が満ちている。

「まさか」

あでやかな衣装のすそを払つて女が振り返つた。まっすぐに垂れた黒髪が房飾りのように揺れる。

「城山には城山の法そらがあるよつて、あちりこなあちりの法があるといつ物。記しなさい、宙。哀しい橋姫の話を」

1) 今は昔

その女は都から遠く離れた土地に生まれた。

父と母にそれまで子はなく、あらゆる神仏に祈り初めて生まれた子だった。

女は掌の上の玉のいとく大事に育てられた。

琴を習い、歌の道を習つた。

香を焚き染め、鮮やかな衣を纏つた。

そうして年月を重ね、年頃になると豪族に見初められた。

男の家は豊かで、豪族の妻としては豊かな暮らし^{しが}が約束された。けれど・・・否 女は言つた。

神仏より授かつたこの身、かような男の下で朽ちるはずがない。

玉の輿を望む少女を探し、身代わりに仕立て上げ、豪族の家に上らせ、自らは父母と都たつきを日指した。

習い覚えた琴は生計の足しになり、また都人の目に留まる機会を『

えた。

女は貴人の腰元となり、側女となつた。
まばゆいばかりの丹。

美しく、また教養に恵まれた人々。
芳しい香り。

耳心地のよい音曲に、その身を贊美する人々の声。
寵が過ぎれば、足元を掬おうとする者が現れるのが世の常。
それこそが、人の、女の業。
都に噂あり。

貴人何某の正妻が病の床に就き、あらゆる薬師くすしを用いても平癒せぬ
はあやし。

陰陽、僧を用いて探れば、災禍の源、側女くわいじょにあり。
側女の名、紅葉くれはと申す。

正妻の座を狙わんとして呪いするなり。

女の心はどこか冷めていて、その身の申し開きさえしなかつた。
この身が高みにあるときは、こぞつて麗句を口にしたものたち。
彼らが今口にするのは、嘲りと乾いた笑い。

この場所は、色と香りに溢れ美しい。

けれど、ほら。

御簾の影、几帳の向こう側で交わされるのは嫉妬、羨望。罷と策略。

その卑しさや淫猥ささえも、ここでは甘い。

咲き誇り、熟れすぎた色をたたえて、腐り落ちるしかない、まるで
婀娜花あたはなのようだ。

未練などなかつた。

女は、都を追われた。

身重の体で流れ着いた場所は、水清く、木々の麗しい土地だつた。

人の心根は穏やかで、女と父母を下にも置かぬほど大切にした。

子も生まれた。

故郷の豪族から、逃れてきた少女も呼び寄せ、はじめた暮らしが予

想外に穏やかだつた。

作付けの相談を持ちかけられれば、都より持参した書物を開いて、知恵を授けてやつた。

野党が出たと言えば、都の警護について見聞きしたことを教えてやつた。

琴を教え、歌を詠む。里の者は女の雅な姿をそつと見守る。けれど、その暮らしも長くは続かなかつた。

都より、討つ手が来たのだ。

『徒党を組んで都を攻めようとしてる』

富む里を妬んだ豪族たちの策略だつた。

・・・女一人に、よつてたかつて醜いこと。

女はあわてなかつた。

武人をもてなし、敵意のないことを知らせ、子が生まれた旨を文にしたためて都に返した。

美しい紅が里を染め上げたその季節に、再び武人は姿を現した。

白刃と悲鳴を聞いて、女は知つた。

あの正妻は都から、わが身と子を追い出しただけでは足りなかつたのだと。

2) 羽化

乾いて、掠れた音。
ぱさり、ぱさりと。

ほら、また。

我に返つて、両の臉を硬く閉じていたことに気付いた。
ゆっくりと開いた眼まなこが映したのは、濁りのない青。

秋の空は何処までも澄んで、遠く、高い。

そこに燃えるような紅葉が瞳を捕らえる。
色目いろめのなんとはつきりとしたことか。

少しづつ厭わしくなる荒い呼吸の音が鼓膜を震わせる。

肘に力を入れて身を起こそうとするが、胸に何か重い物が載つてい

る。

はたと思いあたつてかきむしりたいほどの痛みが胸を貫いた。
無事でないことは分かつていた。

抱き起こしたわが子はゆらりと不自然な体制のまま、鮮やかな紅い
落ち葉に埋もれるように倒れこんだ。

・・・冷たい。重く、鈍い柔らかさ。

一時いわどきにあの地獄絵図のよつたな光景がよみがえって、女はうつろに辺りを見回した。

ぱさり。ぱさり。

あとから、あとから色づいた葉が天より落ちてくる。まるで、血の
ような紅い葉

その落下する音が、確かに静寂を刻む。
すべてが終わった。この身に許されたと信じていた喜びも希望も死
に絶え、ここにはもはや骸のよつたなこの身以外に何もない。
鬼女。そう呼ばれた。

鬼女。呼ばわれて、泣き叫んだ。
違う。私は人だ。

泣いて、笑つて、怒り、楽しむ。短い命の火を燃やしながら、それ
にすがつて生きるなんら他と変わらぬ人だ。

私が何をしたというのだ。

謂れのない咎とがも甘んじて受けた。

人の道をそれることも、この身を恥じることは何一つ、犯しては來
なかつた。

神仏に望んで、生まれた子だと?

ならばなぜ、かような生き筋を辿らねばならぬのか。

踏みにじられ、虐げられ、この生き筋の何に感謝をささげればいい
のか?

ぱさり。ぱさり。掌はわが子の血で真つ赤に濡れていた。

すぐそばに、最後までそばにいた友の赤黒い頬が見えた。

そこから半歩も行かぬところに半ば落ち葉に埋もれているのは、見

慣れた下女の着物の色。

ぱさり。ぱさり。

紅い、紅い色。

怒り・・・悲しみ。

否 そんな言葉など・・・言葉になどできはしない。

強いて言えば・・・そう、鬼。

くらくて、陰懾で、まがまがしくて、闇と血と吐き氣と痛みと嘆きと、呻きと、憎しみと、ざるざるとした私自身がとぐらを巻いて・・・

・そうだ。

思わずあげた声は、紛れもなく笑い声だつた。

鬼だ。それが私の深いところを満たす。

鬼女。そう呼ばれた。哀しかつた？

鬼女。いいえ・・・ほら、もう馴染んできた。

鬼女。そうよ。掌の朱をそつと胸に押し当てた。

思い知るがいい。

その身に刻むといい。

蝶アゲハが割れて皮を落として、毒蛾が生まれ出でるよウうに。

蜘蛛の子が親の遺骸を食い破つてその姿を現すよウうに。

お前たちが示したのだ。わたしの進むべき道を。

お前たちが与えたのだ。わたしの新しい姿を。

さあ、味わうがいい。

私から、『人』を奪つたその罰を。お前たちの行いを。
子々孫々・・・末代まで。

いいや。激しくその考えを否定した。

足りぬ。その友、隣人、知人、敵。縁と縁を結ぶその細い糸をたどり、小さな虫が根を伝つて大木をその根から腐らせ、食らい尽くすように。糸から糸、根から根。そう、根絶やしに。

女は立ち上がつた。袴の裾が乱れたが、そんなことはもはや気にもならぬ。

額が裂けて角が生え、目が光、口から牙がのぞいつとも本望だ。

そうなればきっと千里を駆けて、思いを遂げにいくだらう。

取り出した鮮やかな錦の袋。

そこから滑り落ちた冷たい表面には、禍々しいほどに整った女の顔。

懐剣の切つ先をぴたりと身に添わせる。

れなが蛹が羽化する時だ。

紅は血の色、炎の色。紅葉の色。

逃しはしない。

くつくつと女が笑った。

本物の鬼女になつてやる。

最後の一葉まで、きっとむせぼつてやる。

これが・・・始まりだ。

ササガネです。何はともあれ、ネットの投票で票を入れてくださった貴方！（そう、スクロールの指が止まつた貴方です！）厚く厚く御礼申し上げます。

しばらく多忙につき、更新が難しい状況だつた（今も状況は続いているんですけど）のですが、ネットの投票をして頂いているのを見ると、俄然、書こうという気が沸いてきます。本当にありがとうございます。

では、本題に。

この章は初めて次の話の頭についていたんですけど、急遽切り離して、間に入れることにしました。鬼女誕生の章です。少し雰囲気変えて見ました。次回は通常営業です。

ササガネはお話を夜に書きます。（昼間は、昼の顔がありますんで）今も丑三つ時です。昨日次話を書きながら、だんだん怖くなつてしまつて。基本、幽霊ネタなんで。自分で書いて自分で怯えてたら世話ないです。

けれど、よんでもぐだつてる方々の中に物書きさんが居たら、分かってくれると思うんです！

次話はわらべ歌遊びを交えて書いています。

しかし、何であんなにあの歌（まだ、秘密）は怖いんでしょうかね。しかも、ササガネは一番すきな遊びでした。生きている何かを煮て食つて、化けて出られている歌ではないですか。（お分かりになります？）

怖くなつてきたので、撤収です。

次話でお会いしましょう！

皇月の「るる。 霊世」(上巻) (前書き)

お久しぶりです。いろいろ、実生活で忙しくここにたどり着けませんでした。遅ればせながら今年もよろしくお願いします!

童は額の汗をぬぐつた。

長い長い石段を登りきると、噂どおりに黒々と古い富があった。
闇参り・・・叶え事を一心不乱に思い続け、山を登れば願いを聞き届ける富にたどり着ける。

それが言い伝えであった。

下界からは少しも見えなかつたが、富の頑丈な門には折から吹く風に微塵も揺らがぬ異形の灯火がともつてゐる。

「・・・・」

富の前の上と下を分かつ一本の柱をくぐりひつとすると、突然体が強張つた。

頭を無理やり押さえつけられるような威圧感についに膝を折る。

「そこな童」

声を辿つて視線を上げるといつの中に、胸に宝珠たまを下げた少女が傍らに立ち、強いまなざしで千尋を見下ろしていた。

優雅な童装束めいさんぬしではあるが、ぞつとするような冷たい目をしている。

「こには明山主めいさんぬしが富じや。行きはよいよい帰りは怖い・・・知らぬかえ」

少女が指で一つの柱の先を指し示す。

初めこの威圧感は少女から発せられるものとばかり思つていた。

けれど、いまは分かる。

明明とした異形の光に照らされた白い玉砂利のその先。

閉ざされた扉のその向こうから。静かに漂つてくるその気配。

額づいたその額がいよいよ地に触れようとする。

「あれより先は人の住処ではない、どうだ。怖いが、恐ろしいか。声もまい」

嗤嗤つような声に、思わず歯軋り。

・・・怖いものか。

・・・恐ろしことなど、あるものか。

苦悶の表情を浮かべた養父母の顔が脳裏を焼く。

怖いことなど、あるものか。

ありなど、しない。

心の奥底から、頭を擡げる朱よりも黒よりもくつきりと鮮やかな感情。

胸の奥底で暗い色を放つて燃える冷たく消えることのない炎。ジリと砂利が首を立てたのは、両の手に力を入れたから。決して・・・許せるものか。

この魂に変えても。

圧に抗いじわじわと頭を上げる。

頑強に逆らつた顎から冷や汗がしたたり落ちた。少女が含み笑つたその時。

砂利を踏む音がした。

「闇参りとは、珍しい」

たおやかな芳香が鼻腔をかすめ、しつとつとつややかな風が耳朶を掠める。

「あぶく、意地悪はおやめなさいな」

涼やかな声に思わず顔を上げて、体が軽くなつたことに気がつく。鮮やかな唐衣が目を射た。

この世のものとも思えぬ端正な面立ちが穢やかに向けられている。

「明山主」

傍らの少女がつぶやいて、跪すべく。

「許しなさい。この娘はまだ生まれて間もない。だから獸の性が残つていて、少し意地悪なの・・・さて」

その人が美しい声で、名を呼んだ。

ここに来てより一度も名乗つたことがないのに、呼ばれて思わず目を見張る。

「貴方の望みは・・・そうね・・・その刀を振るつてふさわしい打つ手を知らせよと、そういうことね」

「

はつとして、思わず続きをまつ。

「貴方と鍛冶宗由の打つた刀は確かに稀有だけれど、人ならざる者を討つには、到底及ばない。刀を抜い御覧なさいな。それが、本当にただの鈍らか、それとも何かが足らぬだけなのか、それとも討手が粗忽者であるためなのか。お見せなさいな」

いま一度、畏怖をこめて平伏し、持参した刀をそつと抜き放つ。白刃が燃える灯火の明かりを捕らえて、赤い光を放つた。

山の主はその光を細めた目で受け止めるが、顔をそらして明山の深い森を見遣つた。

・・・ そうねと小さくなつぶやき。

やがて唇に滴るような微笑が浮かぶ。

子供のように邪気がなく、またとても残酷な微笑み。女神と呼ばれる存在の、内に秘めたる聖と魔性のそれぞれに確かにありようを顯にする。

「近頃、わたくしの山でわたくしの許しもなくわたくしに従う八百の物の怪を駆つて、遊ぼうとするひづるさい獸がいるの」

「獸？」

「尾は九つ、姿は狐。毛並みはすばらしい白金・・・あれが欲しい。手元におきたいわ」

「・・・ それは・・・ 九尾」

「それを狩つてきて頂戴。我が元に下らせて」

「・・・ 下らせるとは・・・ そのようなこと、人たるわが身にて」
「方法は、おのずと知れる・・・ それができずして、紅葉を打つことなどできるものか。打つ手は端からお前より他にはない。分かつたなら、おさがり。行つて、獸を狩つておいで」

明山主は背中を向けた。

つややかな黒髪が衣^{きぬ}の上でゆれた。
灯火が消え、あたりに闇が落ちる。

深い深い明山の闇。

九尾の狐・・・ 神を相手にするようなものではないか。

けれど、決めたのだ。

この命を賭しても必ず成し得よつと。

童は刀の柄を握り締めた。

私は・・・決して、退かぬ。

そして、決して死なぬ。

この志、遂げるまでは。

（1）

雨が降つてゐる。

きれいな水が降つてゐる。

ととをまつたら、そんなんずぶぬれになつて。

五つになつたばかりの豊虫ヒヨウジが、あまり意味もわからぬまま、ただ父親を見上げてはしゃいでいる。

さあ、これで助かつたぞ！ 豊作ヒヨウじや。

そう言つて笑つてゐるのは、邑の長ヒヨウさま。

落ちてくる雨粒が顔をたたいてうるさいのもそのままで、それでも臉をひくつかせながら、口をあけぱなし。天のその恵みの生まれ来る先に目を凝らしてゐるのは、仲のよかつた幼馴染。

その唇が言葉をつぶやいた。

なんて言つてゐる？

「ノノアメハアノ」

鼻をつままれても分からぬよつな暗がりで我に返つた。

最後のその瞬間に、だらしなく開かないよつて、むらじ紐で縛つて整えた足がこわばつて、しひれていた。

目を開いて飛び込んできたのは、鮮やかな布ヒメの色。

ここにいることにならなければ、少女が触れることもないまま一生

を終わるはずの高価な着物。

ここにいることにならなければ、野良仕事で疲れたとと様の肩を揉み、豊虫を寝かしつけて、そうして・・・

輿に乗せられてここまで来たときには、酒とおなかいっぱいの食べ物で、ほかほかしていたのに、今はこの体がひどく薄っぺらになってしまったよう。

しんと静まりかえった闇の中。

昼なのか、夜なのか。もはや分からぬ。

気が変になりそう。

息がしづらい。

息が足らない。

手で口元を覆う。

本当は、胸をかきむしりたい。

あたしは・・・

霞逝く意識の中で、必死に手を合わせた。

とと様の笑顔、豊虫の穏やかな寝顔。

小高い丘から見下ろした青田の広がり。

いつもあたしたちをお守りくださる神様、仏様。

どうか、どうか。

この身と命で、村を購つてください。

ひもじいのも、痛いのも、苦しいのもいやなんです。
人が死ぬのは、いや。人が争うのも、いや。

おなかをすかせた弟は、今日もうちで泣いている。

食べる物どころか、水さえもないと云つて、役人が税を出せとやつてくれる。

怒鳴り声と鞭の音が戸口に迫つてくる。

やつと役人が帰つて、日が落ちて、夜が来る。

夜が来るのが怖い。

静かになつたときに、いろいろ考えなくてはいけないのが怖い。おなかをすかせて、目を閉じても眠ることしかできない。

明日がやつてくるのが怖い。

朝になるのが怖い。

ずっとこんな朝が永遠に続くのだと、気がつくのが怖い。

あたしたちはどこにもいけないのに。

逃げることもできないのに。

神様。

遠いところにいらして、あたしたちが乾いた土くれにまみれてもがいているのをみていらっしゃつて、少しでも哀れんでくださるのなら。

助けてください。

一粒の雨、一粒の米のために祈つているんじゃありません。

明日も、一月も、一年も、十年も、百年も・・・・いえ、千年でも・

・・・ここで守りたい。

どうか、あたしを村を守る者に生まれかえさせてください。

それが、自分で望んだあたしの望みなのです。

(2)

黒い物体の表面に緑の苔がまだらについている。

鼻腔を掠めるどこか物悲しい薫り。

極め付けが、カラスの鳴き声。

目の前に広がるのは、一面の・・・・いや、見間違いに違いない。

落ち着け、私。

右手を見れば、開けた視界いつぱいに美しい景色が見える。

空は青。

山は緑。

少し下がつたところに、じんまりとした可愛らしいバス停が見える。

そして・・・眼前の・・・墓場。

助手席のナビが大きくなめ息。

「たまちやん。ダメじゃないか」

「はあ?」

「ダメだよ。引き寄せたり、引き寄せられたりなんかして」

「なに言つてんだ。だいたい、武兄!^{たけの}あんたの言つとおりに来たらこうなつたんだよ!」

「実は・・・」のうの苦手なんだ

今更の告白・・・いや、爆弾発言。

もう分かつてたけど。なんだか、道幅狭くなつてきたところには半ば気づきかけてたんだけど。

・・・とつぐに手おくれだつて。

「苦手なら、あんたが運転して、私がナビすればよかつたんじゃないか!」

「仕方ないだろ? それに、石上くんは僕の友達だよ。この旅行だつて、彼が僕にどうぞつて言つたから、実現したんだよ」

「いや、私も佐代ちゃんからお誘いもらつたから」

今ゴールデンウィークの真っ只中。

それぞれ、同じ学年の石上兄と妹からゴールデンウィークでもつて閉館するという彼らの実家・・・石上旅館に招かれたのだ。

・・・こんなことなら、皓^{こう}を連れてくるんだつた

「愚弟はな、最近付き合い悪いんだよ。本当だつたら週末のたびに

家に帰るはずなのに。何かと言い訳して寮に住み着いてる

武の弟の皓は今年から、県内の白露高校に進学している。

家族とは週末ごとに戻る約束だったのに、所属している地域研究会の活動が忙しいとか、図書委員の蔵書整理がどうとか、いろいろ言い訳して戻つてこない。

「いい友達でもできたんじゃない？兄ちゃん離れするときだつたんだよ」

「・・・そうだな。それに・・・」

顔を背けた武兄たけのが、横顔でポツリとつぶやくよひに言つた。

「あそこは城山だしな」

従兄弟の少しどがつた顎の形に、斜めになつた太陽の光が当たつてるのに気がついた。

我に返る。

早くしないとたどり着く前に日が暮れるじゃないか。
こんな薄気味わるいところで。

携帯は圈外だし。

日本にこんな未開の地がまだ残つていたとは。
サイドミラーでその狭さを確認。

とりあえずバックだ。

ヒターんは無理。

ガードレールなしのかけ沿いの道を、車一台やつとの道を、バックで・・・戻る。

ええ、そうとも・・・若葉マークをつけて。

「どう考へても、あんたが運転すればよかつたんだ」

へらへらと罪のない笑顔で従兄弟が言つ。

「無理無理。おいしい大人のジュース飲んじゃたんだし」

「だ・・・から、あの時飲むなといったんだ。だからナビのねじもどつかで落つことしてくるんだ」

「ナビはね、山間部、住宅地、天候の具合では交信が途絶えて、誤差が生じることがあるんだ」

「へえ、あんたGPSついてんの？・・・ここどこが、住宅地だ。天候は晴れだろう。山といつてもここは丘のてっぺんで、さえぎる

物は何もない」

「見えないシールドが、さ」

「へえ、あんた何かと交信してんだ。衛星か？神様か？宇宙人か？・・ああ・・・そうか、異次元だな。お前の故郷は第三惑星か？早くバルタン星人にでも迎えに来てもらえ」

「たまちやん、僕がいなくなったら、寂しいでしょ。それに第一、僕、この車唯一のナビだよ。高性能機器だよ。僕いなくなると困るよう」

・・・一体、誰のせいでこうなったんだ。

「キャトルミュー・ティ・レー・ションだ・・・おまえ、世界平和・・・恒久的宇宙平和のために、キャトルミュー・ティ・レー・ションされてしまえ」

と、後部座席から衝撃。

「つ？」

言い争いをやめて後部座席を振り返ると、そこでは一人の化生がつかみ合っている。

「誰だ？勝手に他人のおやつに手をつけようとしてんのー・・・可愛らしい華やかな着物を纏つた春日が、眉をこりぱいに引き上げて叫んでいる。

「こりやあ、親切だ。・・・駄目だよー春日おやつは300円までつて決めただろー！」

白々しい大童子の微笑み。

「おやつは300円分だわね！」

「じゃあ・・・なんですか？これは。なんですか？春日ちゃん」

・・・お・・・お前ら・・・。

「こつちは、夜食。こつちは別腹だわね」

「先生え、そんな子は連れて行けません。こじでおやつを残しておりなさい」

大童子が春日を押しやがつとすると、春日が負けじとその手にしがみつく。

「いー やあだ、前歯でくらいついて、離れないわね」
カプリと鮮やかに大口を開けて大童子に食らいつけば、とうの大童子が悲鳴を上げる。

「いたたたたたつ。お前、どんな躰されたの？母ちゃんの顔みてみたいわ・・・食うな食うな、お前共食い系妖怪だつたのかよ」
・・・いや・・・多くは望むまい。

「私の母は荒れ狂う日本海、父は実り豊かな北山山系だわね！だれが、共食い系だ・・・お前のようなだめ野郎が、私と同種と思うなよ」

「じゃあ、海にでも山にでも帰りなさいっ！とーちゃんとかーちゃんが心配してんぞ！」

・・・楽しい旅？・・・だし。

「あつ！UF〇・・・！」

右指を虚空に向けた春日の動きに、つられて大童子が視線をさまよわせる。注意をそらした春日の左手が容赦なく菓子袋を奪い去る。

「こ、卑怯者っ。嘘つきは泥棒の始まりってんだっ、しらねえのか？」
「小童。こんな子供だましによく引っかかっておいでだね」

・・・収集がつかないよ。

「おーまーえら、この状況わかつてんのかつ。携帯も通じない、頼みのナビもいかれてる。そして深い山奥に置き去りなんだよつ。村人一号も二号も三号も見えないんだよつ！」

すっと息を吸つて続ける。化生二人の肩越しに小さなバス停の青いベンチがちらりと見えた。

「静かにし・・・」

二人の化生と、武兄が、急に言葉を止めた私の顔を見た。
だつて・・・。

私は見たものが幻ではないかと思つて何度も何度も瞬きをした。
指をそろそろと持ち上げて、先ほどまで確かに無人だつたバス停を指した。

三人同時に頭を動かして振り返る。

その青いベンチには、今4、5歳ほどの子供が呆然とした様子で腰掛けている。

「子供が・・・急に・・・椅子から」

「そう・・・ぽわんと。

「椅子から?」

こちらを振り返った武兄がすっと目を眇めて、聞き返した。
私は、「ぐりとのどを鳴らす。

のどが・・・カラカラだ。

「椅子から沸いて出た」

(3)

たどり着いた石上旅館は先祖代々三百年、直し直し受け継いできた
という噂のとおりの貫禄。

平屋の木造建築は黒光りする瓦が緻密に積まれていて、古めかしい
ことこの上ない。

しかし、まず先決は例の子供だ。

おかしな登場の仕方をしたのはさておき、どうやら妖怪、化生の類
ではないし、生身の人間の子供だ。

まず電話を借りて警察に迷子の届出をした方がいい。

家族が心配しているかもしねりない。

これが、武兄と私の見解。

後部座席の春日と大童子に挟まれて、子供は自失したように遠くの
一点を見つめたままだ。

着衣は汚れていないし、見たところとくに目立つた外傷もない。

「おい・・・餓鬼。どこから來たんだ」

大童子がペシペシと頭をたたく。

この化生は、ぶつきらぼうを装いながら、この新しい客人が珍しく

てちょっとかいを出したくてたまらないらしいのだ。

「こら、汚い手で触るな」

私の声に大童子が不満そうに手を引っ込めると子供の目が不安げに動いた。

手を伸ばして大童子の暗い衣のすそをつかむ。
指が白くなるほど。

「おつ。見ろ、たまき。子供は正直じゃねえか。誰が一番心きよらかか、ちゃあんと分かつてんんだ。子供は神様の物だとよく言つたもんだね」

大喜びしている大童子の横で、春日が不機嫌そうに沈黙している。
いかん、これはまたけんかの種だ。

「くだらないこと言つてないで、その子をおろしてやつて」
素直に大童子が従つと、先ほどまで死んだように穏やかだった旅館の中から人々が転がるよつに飛び出してきた。

「祐ちゃん！」

母親と思しき人が子供の身体をしつかり抱く。

「どうして、いなくなつたりしたんつ？」

ゆすぶられても子供はどこか上の空で、くたりくたりと頭が重そうにゆれた。

「どうも」親切に

安堵の表情の年配の男が近づいてきて、私たちに頭を下げた。

「あの、僕、今日たずねることになつてた日下です。さつき迷つて上方の墓地に言つてしまつて、そこのバス停でこのお子さんを見つけたんです。どうも家の人がないみたいだし、様子がおかしかつたので、旅館で電話を借りて警察に連絡しようつれってきたんです。ここのお子だつたんですね」

武兄が手短に説明していると、庭の方からタイミングよく石上隆弘・佐代兄妹が姿を現した。

「わあ、よかつた」

「祐ちゃん、日下一族が見つけてくれたの？」

一族・・・固有名詞に「」をつけると変な武装集団みたいじやないか。

幾分落ち着いた様子の母親がこちらに初めて目を向けた。

「あの・・・申し遅れまして・・・息子の祐太をつれてきて頂いて、本当にありがとうございます。佐代と隆弘の姉の幸代です」

「父の隆夫です」

年配の男が言ったので、にこやかに武兄が会釈した。

「改めまして、僕が田下武、こっちが環です」

武兄が私の後頭部に手を掛け、無理やりお辞儀させる。

そんなことしなくても、礼儀ぐらいは心得ている。

反論の言葉を世間体という大きな壁を前に飲み下し、引きつる頬を押さえにこやかに微笑む。

「こんにちわ。お世話になります」

「で・・・」

全員の視線が幸代に釣られて大童子達の方に向く。

・・・え?

「」

ぎょっとして武兄と顔を見合わせる。

今日はこいつら『見える』バージョンなのか、そんなこと打ち合わせしていなかつたぞ。

武兄が眉をひそめて、小さく首を振る。

無理だ、どうごまかせと言うんだ。

私は片眉を上げる。

さて、どうする。

われわれの関係性を・・・

武兄と無言の問答を繰り広げていると、ついぞ聞いたことのないさわやかな声が鼓膜に飛び込んできた。

「あ、どうも。実は僕、石上旅館に一度きたことがあって、今年閉館するって聞いて、懐かしさのあまり無理についてきてしまったんです。僕、日下一族の友達で尾上大三郎といいます。こっちは妹の・

・・・

えつと、だれだらうじのわやかの上ない男は。

「陽菜です。よろしくお願ひします」

可愛らしき声。

あれ、春日、出雲弁はどこに行つた?

そう思つたとき。

「ひいおじいちゃんが・・・連れ戻してくれた」

はつきりと幼い声が言つた。

「祐たん、どうしたの?・・・おじいちゃんつて。おじいちゃんは祐たんが赤ちゃんときにくくなつたよ。覚えてるわけないじゃない」佐代が屈んで問うと、祐太がようやく焦点を結んだ視線を皆に向けた。

「ひいおじいちゃんがこっち側に連れ戻してくれたの」

その場にいる者がみな、子供の語る異様な話に耳をすませてこる。

「おじいちゃんはどこ?」

私の問いに祐太は首を横に振つた。

「女の子に連れて行かれちゃつた。あとはわからんない・・・でも」

「でも?」

「ひいおじいちゃんは、逃げろつて」

子供は澄んだ瞳で皆をしつかりと見た。

子供は確かに神の側のものだ。

私は静かに身体の毛が逆立つていくような感覚を覚える。なんだろう。怖い。

とても怖い。

この話は、よくな。

「早く、ここから、少しでも早く逃げろ」

子供は後に何度も思い出すことになるその言葉で、はつあつと警告した。

「ヤマメが降りてくる」

初めての春を覚えている。

あたしは、村を眺められる場所から、水の張られた田んぼを見ていた。

田んぼは空の色を移し、きらきらと輝いていたつけ。

本当は、昔そうしていたようにあぜの間を歩き回り温かくゆるんだやわらかい水に触れたかつたけれど、この変わってしまった体では到底里におりることはできない心持だった。

そつと笹の小道を下り、開けた場所から様子を伺うと、以前より遠くを見渡せる日を得た私には、村の者達が田植えの準備をしているのが手に取るようにな分かつた。

豊虫も着物をからげておお張り切りだ。

ふと豊虫が顔を上げてあたりをきょろきょろと見回した。

・・・あねちやま

その幼い声に胸をつかれる。

そうだよ。あねちやまはここにいるよ。

ここでずっと豊虫のことを見守っているよ。豊虫の子や孫が飢えないうように、楽しく暮らせるように。

豊虫の傍らに、見覚えのある女が立つてその頭をなでている。

あ、あれはお隣の後家さん。

女手のいなくなつたうちの後妻に来たのだとすぐに知れる。

ああ、もう下界にはあたしの居場所などないのだ。

そう、この姿かたちはもはやあたしだということすら分かりはしないだろう。

でも、いいのだ。

あたしはこうして雨を降らせ、夏にいつくしんでは育み、秋には実らせ、冬には癒すのだ。

そうして村を守るのだ。

下界のみんながあたしに手を合わせている。

みやさん、どうか今年の実りがよくなりりますよ！」。

分かつてるよ。

分かつてる。

でも、もうだれもあたしの本当の名前を呼んではくれない。ぽつかり開いた穴から染み出してくるようなこの寂しさをあたしはいつか、忘れよう。

そうしてみんなが飢えることのない、病に怯えることのない村を一日、一日、ずっと先まで積みあげていくのだ。

温泉饅頭を両の手で二つに割ると中身は栗餡だった。
うん、最高。

けれど、今日に限つて私の連れはみんな大人しい。そもそも、大童子と春日が借りてきた猫のように大人しくお茶をすすっていることが異常事態だ。

二人とも実体化バージョンで居座るつもりらしく、先ほど部屋にやつてきた仲居さんもきちんと人数分のお茶と菓子を出してくれた。けれど、いずれも何事か考えごとにふけっていて静かなことこの上ない。

特に春日は、どこか遠くの気配を辿るように時折、障子の向こうをじっと凝視している。

突然、武兄がぽつりと漏らした。

「嫌なところだな」

「ちげえねえ」

ふふんと大童子が鼻で笑ったとき、廊下にパタパタと軽い足音が響いた。

続いて『待ちなさい、祐たん』という佐代の声。

とんと襖が開け放たれ、祐太が飛び込んできてしまつすぐ大童子に歩み寄るとその背中に隠れた。

「おうい、どうした餓鬼」

さしもの大童子も、驚いたとばかりに首をねじつて幼子を見た。祐太は既に大童子の着物のすそをつかんで、離すもんかといわんばかり。

「わあ、祐たんだめじやない」

そう言つて、呆れ顔の佐代が襖の隙間から顔をのぞかせた。

「ごめんね。疲れているのに」

「いいよ。でもどうしたの？」

私の問いに少し困り顔の佐代。

祐太はいよいよ持つて大童子の背中に隠れる。

ひどく怯えているような気がするのは、気のせいいか?

「さつきから、祐たんたら女の子がいるつて聽かないんだ。氣味悪いたら。あ、勘違いしないで、うち別に幽霊旅館じやないから」

「そうだろうね」

武兄が頷いた。

「ところで、ここ辺りで人が住んでるのつてこの旅館だけだね」

「え、ああそうです」

突然の質問に面食らつた様子で佐代が頷いた。

武兄。

何を意図した質問だろう、私は飄々とした武兄の顔を観察する。

「初めはこの辺りには村があつたらしいんですけど、交通の便も悪いし、病院は遠いしバスも本数ないでしょ。だから年寄りが住むには不便で。若い人はみんな出て行くし、今ではうちだけになつちゃつたんです。ちっちゃい時は10件ぐらいあつたんですが。仲居さんも実は隣の町から無理言つてきてもらつてて

「ふうん。じゃあ実質、住んでるは家族だけなんだね」

「はい」

佐代が頷いたときだつた。

すぐその廊下で幸代さんの悲鳴が上がつた。
何事かと駆けつけると、幸代さんが板張りの廊下でペタリと座り込んでいる。

反対側の廊下から仲居さんたちと石上父がかけてくるのが見える。
どうしよう、どうしようつづぶやいてい。

「おねえちゃん。どうしたの？」

佐代が強く言つてゆすぶると、幸代さんはゆつくつと首を左右に振
りながら、自ら口にしていふことが信じられないことつづに眉根にしわを寄せて言つた。

「隆弘が田の前で、煙みたいに消えちやつた」

居合わせた全員が、それをにわかに信じがたく、言葉がでない。た
しかな動搖がお互の間を埋めている。

「消えるつて・・・」

壁と柱で仕切られた狭い廊下。

しかもここは離れで、密室はここだけ。
消えようがない。

私はバス停からの祐太出現の様を思い出していた。
あんなふうにぼわんときえてしまつたのか。

後ろで大童子が武兄にいつた。

「お前、城山でやつてたこと、まだできるか」

「・・・見ぐびつてんの？」

プライドの高い従兄弟は不適に笑つてはいるのひりつ。

大童子が『まさか』^{まさかじゅ}と喉で囁く。

「だつたら、境目を作つとけ、気休めにはなるだらつ」
そして私たちにしか聞こえない声で付け足した。

『氣をつける。狩りが始まつてゐる』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5075f/>

浮生夢のごとし

2010年10月10日21時07分発行